
ふたりが家族になるまでの

京夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふたりが家族になるまでの

【Nコード】

N3308W

【作者名】

京夜

【あらすじ】

「同棲してみるか？ ……私としては不本意だが」「ぶっ！」「どうせいつて、同棲？！」同棲を切り出したのは、彼ではなく私の父だった。私は開いた口がふさがらず、驚いた彼は紅茶を盛大に吹いていた。こんな話になった裏には、母達の思惑があるようだけど……。話に乗せられて、同棲を始めた私と彼。戸惑いながらも、ふたりで生活を始めたその先には……。少し大人になったふたりが、小さな家族になるまでを綴ったほのぼの恋愛ストーリーです。

『勉強の神様は人見知り』の後日談となりますので、未読の方は、

是非『勉強の神様は人見知り』を先にお読みください。

恋愛描写の一部にR15的な表現がありますので、ご注意ください。
い。

同棲が始まった理由

「同棲してみるか？ …… 私としては不本意だが」

父である如月実が、真面目な顔でそうつぶやいた。

「ぶっ！」

「どうせいつて、同棲？！」

私は父が何を言い出したのか理解できず、開いた口が塞がらなかった。

そして、もうひとりの当事者……彼である一柳誠は飲んでいた紅茶を盛大に吹いていた。

それは、毎年恒例の12月28日の誕生日会の日だった。

二人の誕生日が偶然にも同じだったため、高校1年から毎年どちらかの家だったり、お店だったりで家族一緒に誕生日会を開いていた。

今日は二人にとって19歳の誕生日。

私の家で、私と父と母、それと誠さんと彼のお母さんである真穂さんの5人で、楽しい時間を過ごしていた時の出来事だった。

「二人とも結婚のことはどう考えているんだ？」

父が真剣な表情で聞いてきた。

19歳になったばかりの子供に結婚の話聞くものだろうか？ という疑問が浮かぶが、確かに誠さんとはいつかは結婚したいな、

とは思っていた。

それは、誠さんも同じだった。

ここは男である自分が行くべき、と考えたようで、誠さんから話し出してくれた。

「いつか結婚できたらいいな、とは思っています。ただ、まだ学生の身ですので、働き始めてからかな……と」
「ほら、そうだよ。そう考えるよ、普通は」

父が振り向いた先には、母と真穂さんの顔があった。
どうやらこの同棲話は、二人の母親が話しあって生まれたものらしいが、父はこの話にあまり乗り気ではないようだ。それが冒頭の「不本意」という言葉につながっているのだろう。

母が代わりに解説してくれた。

「二人が結婚を前提に真面目なお付き合いをしているのは解っているわ。そして、それは私達も歓迎しているの。結婚に反対ではないわ。ただね、いつ結婚するかが心配になってしまったの」

真穂さんがうなずきながら、解説を続けた。

「医学部は6年間もあるし、レジデントの間は忙しくて結婚どころではないし。そうしたら10年ぐらいは最低でもかかったやう。しかもあなた達、真面目なのはいいけれど、まさか大学合格しても生活スタイルが変わらないとは思わなかったわ」

そう。大学に入学するまではいつも、学校に行くか、それぞれの自宅で一緒に勉強をするかを続けていた。

実は、それが大学を合格しても続いていたのだ。

誠さんの夢が「小児の癌をなくしたい」だし、趣味が勉強だし、受験の前から毎日勉強していたし。

それに付き合ううちに、私までそのリズムに乗ってしまった。

もちろんデートもするし、合間にたくさん話もするので、不満はない。

それどころか、勉強の楽しさを教えてもらってからは、私もそんな生活スタイルが嫌ではなかった。

誠さんというと、いつもいろんな発見があって楽しいのだ。

真穂さんがため息混じりに言葉を続けた。

「こんな真面目な交際を続けていたら、いつまでたっても結婚しないんじゃないかと、心配になって。結婚は時期も大切なのよ。少し時間のある学生のうちに、結婚するなり、子供を産むなりした方がいいと思うの」

何か今、さらっと不穏な言葉を言いませんでした？

結婚？ 子供を産む？

学生のうちにですか？

「それでね。まずは同棲を半年間して、これならば結婚をしてもいいな、と互いに感じたら、20歳の誕生日に結婚をしたらいいんじゃないかなって」

「ねえ」

「私はそんなに急ぐことはないと思うんだが」

母と真穂さんの意見は一致しているようだけど、父はあまり気乗りしていないようだ。

「付き合い始めて13年たってから結婚なんて、そんなに待っていたら、上手く行くものも上手くいかないわよ」

「私としても、ふたりが結婚してくれちゃったほうが安心なんです」

母と真穂さんの言葉に熱が入り始め、父は額に眉を寄せながらも黙ってしまった。

どうやら父もそれ以上の反対ができないようだ。

父は矛先を変えることにした。

「で、君たちはどうしたい？ 無理強いするつもりはない。そうしてもいいよ、という話だけだ」

「そうね。あくまで希望であり、お勧めね。あなた達がどうしたいか、決めていいわ」

互いの両親からの同棲の勧め。

おそらくこんなことを言われるのは、私達ぐらいかも知れないな……と私は他人ごとのように考えていた。

「僕は……いえ、私はまだかさんと一緒に暮らしたいです」

「え？」

思いもよらない、誠さんの力強い返事だった。

誠さんと父が、真面目な顔で視線を交わす。

あたりに緊張感が走り、私も思わず背筋を伸ばしてしまった。

数秒の沈黙。

そして、父がふつと深いため息をついた。

「解った。いいだろう。同棲を許可する。部屋を探しなさい」
「はい。有り難うございます」

誠さんが深々と一礼する。

私の身体と頭は固まったままだった。

同棲……するの？

いま……決まったよね。

しかも、私抜きで。

父は何やら感極まって泣き始めて、誠さんにビールをすすめてくれるし。

母と真穂さんは私の肩を叩いて「良かったね」「頑張るのよ」と励ましているし。

いや、その……私も嬉しいけどね……。

こんなふうに決まるとは思っていなかっただけで……。

まあ、いいや。

ゆっくりな私達らしい始まりか。

私は父と一緒に涙ぐんでいる誠さんを見ながら、そう思った。

私達の同棲は、こんなふうになったのだった。

部屋を決める

その日の夜遅くに、誠さんから電話がかかってきた。

「ごめんなさい。まどかさんの意見を聞かずに勝手に決めてしまったことに、いま気づきました」

気づきましたか……。

でも、ちゃんと電話してきてくれて、嬉しいです。

「いえ、私も同じ気持ちですから大丈夫ですよ。でも、ちょっとびっくりしました」

「何がですか？」

「いや、同棲なんてまだまだ先のことと思っていたんじゃないかと」

「そうですね。確かに」

「じゃあ、なぜ？」

「いや……その……」

電話の向こうで、誠さんが何となく恥ずかしがっているのが伝わる。

見えなくても、何となく表情が思い浮かぶようだ。

「まどかさんとずっと一緒にいたいから……です」

素直な言葉に、私まで頬が熱くなってきた。

いつまでたっても温かい気持ちを伝えてくれる誠さんにも感謝しているが、何度聞いても胸がきゅんとなってしまふ私も相変わらず

かな。

嬉しさで、ちょっとにやけてしまふのは許して欲しい。

「私ですよ。誠さん。楽しみですね」

「はい」

驚きはあったが、今は楽しみのほうが大きい。

二人で暮らすというのは、どんな毎日なのだろうか。

私は早速、動き始めた。

年末年始で不動産屋がやっているわけではないが、今はインターネットというものがあって、物件の検索ぐらいはできる。

自分の部屋にあるノートパソコンを開いて、私は少し調べてみることにした。

場所は大学に通いやすい所が良い。

治安や防犯も大切だ。

できればスーパーが近くにあって欲しい。

値段は安くて……家賃はいくらあたりで探せばいいのだろうか。

部屋……は、えーっと2部屋？ んんっ？ 同じ部屋で寝るの？
いやいや。

部屋を借りる件をひとつとっても、意外と考えるべき点が少ない。それ以外にも、誰かと相談しないといけないことが多々あることに気付いた。

とりあえず、いくつか候補をプリントアウトして、他の人の意見を聞いてみようかな。

母に相談してみると、すっかり乗り気になったようで、真穂さんと連絡をとって新年早々にも一緒に部屋探しをすることが決まった。双方の母親が、子供達と同棲部屋を決めるってどうなのよ……と心のなかだけでつつこみながら、感謝の気持ちで一杯だった。信頼を裏切らないように生活しなくては、と改めて感じる。

ただ、真穂さんならば、

「信頼を裏切らない、っていうのは、結婚して早く子供を見せてくれることよ」

と言いそうで、言葉にして伝えることは控えたけれど。

新年のお参りに、私はこの1年の無事を祈った。

去年も大学合格に新しい大学生活など激動の1年だったけれど、どうやら今年は更にいろいろな事がありそうだ。

こんな人生が待っているなんて、思いもしなかった。

私はこれからの未来を想像して、ちよつとワクワクしていた。

三が日が終わり、私達はようやく開き始めた不動産屋を訪ねた。何故か主導権は母二人が握っていて、誰の部屋を借りるのか解らなくなるほどだった。

「ここ綺麗で、素敵な部屋だわ」

「なんといつても大事なのは防音。外に音が聞こえないことが大切よ」

「素晴らしいキッチンね」

「オートロックがあるし、防犯性が良さそう」

注文が増えるに連れて、何かどんどん高い部屋になっていく。不動産屋のお兄さんも、嬉しそうに魅力的な部屋を勧めてくるのがいけない。

私や誠さんは不安になっていくが、お金を出してくれるのは両親なので、予算は大丈夫なのだろうけれど。

「あの……あまり高くないほうが……」

私は思わずつぶやいてしまったら、母が笑いながら答えてくれた。

「大丈夫よ。小学校から高校まで公立で、塾も家庭教師代もかからずに大学まで進んで、しかも車がいらないうし。この数年間の費用ぐらいは何とでもなるわ。少しぐらい甘えなさい」

両親というのはありがたい存在だな、と改めて感じた。

私も誠さんも申し訳なく感じながらも、部屋は両親の好意に甘えることにした。

最終的に3つに絞り、見学に行くことになった。

1つ目は大学からは少し離れているが、自転車で行ける距離。築年数は6年でまだまだ新しい感じがする。

オートロックもあって、防犯も悪くなさそうだ。

部屋に入ると、母二人の歓声が上がった。

「わあ、いいじゃない」

「うんうん。綺麗だし、日当たりもいい」

確かに南向きに面した窓からは陽がさしていて、冬だというのにほんわかと暖かい。

全室フローリングで、綺麗に掃除されている。

思っていたよりもしつかりとしたキッチンがあり、その1室が10畳ぐらいあってなかなか広い。

さらに、小さな部屋がもう1つある。

学生の部屋というよりは、新婚さんの新居という感じがな。

そんな想像していたら、何となく頬が熱くなってしまった。

新婚さん……ね。

うわぁ……。

「うん。壁もそれなりに厚そうだし、防音もしつかりしてそう」

真穂さん、いやに防音にこだわりますね。

今の住んでいるところで何か困っているのでしょうか？

「そうですね。ここは、防犯と防音には力を入れている部屋です。今までそうしたことでの苦情は聞いていません」

案内をしてくれている店の人が、嬉しそうに説明を加えてくれた。

「もうここで決めちゃってもいいんじゃない？」

「そうね。いいかもね」

1つ目でいきなり母達が決めてしまいそうだったが、誠さんがようやく口を開いてくれた。

「せっかくだから、他の部屋も見ておきましょう。それに、ここは

ちょっと高くない？」

「このぐらいはいいわよ。でもそうね、他もせっかくだから」

すっかりテンションが上がった母二人を引き連れて、残りも見て回ることにした。

しかし、1つ目の印象が良かっただけに、残りの2つも悪くはないが、何となく決定打に欠ける。

広さだとか、防犯だとか。僅かな差だけれど、それならばと1つ目の部屋に戻ってしまう。

私もいつの間にか、1つ目の部屋での妄想が膨らみ始めていた。

冷蔵庫は何にしようか。

木の机がいいな。

観葉植物もひとつぐらいは……。

何かちょっと楽しいぞ。

「うん、1つ目で決まり。二人ともそれでいい？」

真穂さんが笑顔で聞いてくる。

誠さんの表情をうかがってみると、視線があってやっぱり私の表情を確かめている。

私はちよつと笑顔を浮かべて、うなずいた。

私の中ではすでに、あの部屋での生活が始まっていた。

誠さんもうなずいて、母親に答えてくれた。

「はい。そうさせていただきます」

店の人は嬉しそうな笑顔を浮かべて、

「それでは店に戻って、契約の手続きをしましょう」と話を進めてくる。

年明け早々、部屋はあっさりと決まってしまった。

洗濯機と冷蔵庫

すぐに入居できるとのことと、冬休みを良い事に、翌日には必要な物を買うに行くことになった。

今回は誠さんと二人だ。

さすがに今回は母親たちは付き添わず、お金だけを渡して「楽しんでらっしゃい」と送り出してくれた。

確かに楽しみだけれど、不安がないわけでもない。

誠さんと二人で決めるわけなのだが、選ぶときに意見が違ったらどうしたらいいか……。

そこは私が引くべきなのだろうか。

心の片隅で、そんな悩みを抱えていた。

「まずは洗濯機と冷蔵庫を買いに行きましょうか」

「そうですね」

私は誠さんと二人、家電量販店へ行くことにした。

広い店内は、ボーナスの出た家族や、お年玉を持った子供達で賑わっていた。

とは言え、用があるのは冷蔵庫と洗濯機で、そのあたりはそれほど人も多くない。

私達はまず冷蔵庫から見ることにした。

「沢山ありますね」

「そうですね。でも、けっこう絞れますよ」

「そうですね？」

「はい。まずは冷蔵庫の設置場所から大きさの制限があります」

「あつ、確かに！ でも、何センチか……」

「調べてあります」

「……さすがです」

「以前、家のを買い換えた時の経験があるので」

誠さんは照れたように笑いながら、高さや奥行きが書かれた紙を取り出した。

「自炊が多いにしても、二人ですからね。あまり大きくなくていいと思います」

「そうですね」

そううなずきながら、二人、のところで何となく頬が熱くなる。ちらつと見たら、誠さんもとことなく頬が赤い。

一緒だ。

私は思わず笑ってしまった。

誠さんが大きさや機能や値段で候補を絞ってくれる。

私はその中から、色や見た目で選ぶことにした。

思っていた以上にスムーズに決まって、ほっとした。

違和感がないし、誠さんが嬉しそうに機能を説明してくれるのが楽しかった。

本当にこの人は調べることが好きだし、それを楽しんでいるのがよく解る。

私はあの部屋にこの冷蔵庫が置かれた様子を想像して、何となくにやけてしまった。

うん、悪くない。

二人で暮らす、という不安が少しずつ取れていくのを感じた。

次は洗濯機だ。

「洗濯機は少し悩みました」

「何故ですか？」

「うちは洗濯機と乾燥機が別なんです」

「そうでしたね。私のところもです」

「今は一体型が多くて、どちらが良いかと」

「あつ、なるほど」

確かに、今はドラム式の一体型洗濯機が多い。

しかし、その何が問題なのだろうか？

「乾燥機を回している間に洗濯機を使うこともできるし、やっぱり乾燥機だけの方が能力もしっかりしています」

「そうなんですか」

「使ってみたわけではないのですが、調べるとそういう声が多いようです」

「じゃあ、別にしますか？」

「でもスペースの関係もあるので……一体型を使ってみましょうか」

確かに一体型は見た目も良くて、魅力的。

私も誠さんの意見に同意して、ドラム式の洗濯機を購入することにした。

各社にいくつかの特徴はあるものの、冷蔵庫同様それほど悩むこと無く決めることができた。

店の人をお願いしたところ、明後日には配達してくれるとのこと。この調子だと冬休みの間に引越しができてしまいそうだ。

実感と共に、何となく緊張感が高まる。

本当に二人で暮らすんだ……。

ふたりともテレビはあまり見ないので、テレビは買わないことにした。

炊飯器は一世代前のお値打ちな物を選んだ。

そうすると次に必要なのは……。

「……布団、ですね」

「はい」

布団、というだけで恥ずかしくなるのは、別に変な想像をしているからでは無い！……と言いたい。

言いたいけど……否定もできない。

やっぱり、意識してしまう。

だって間取りを考えたら、同じ部屋に布団を並べて眠ることになりそうだし。

ちらつと横を見ると、誠さんもやっぱり顔を真っ赤にしている。

誠さんも意識しているに違いない。

二人の間に緊張感が漂っていて、私としてはこの空気を壊したくなる。

ここはひとつ、甘えてみるか。

私は誠さんの手を取って、嬉しそうにこう言ってみた。

「誠さん、一緒に並んで寝ましようね!」

「あつ、えつ……はい……」

うわぁ、耳まで真つ赤になった。

握った手に、汗までかいている。

かつ、可愛い……。

私は思わず腕に絡みついてしまった。

誠さんはますます恥ずかしそうにしていたが、私は嬉しくてちよ

っと跳ねて歩きたくなる気持ちを抑えて、一緒に並んで歩いた。

もう不安はゼロ。

楽しみで一杯だ。

誠さん、これからも宜しくね!

引越し

ホームセンターで布団と洋服をしまう収納ボックスや机、フライパン、鍋などの生活用品を買い揃える。

有り難いことに、これもまとめて配達してくれるらしい。きっとまだ足りないものもあるかも知れないが、それは生活しながら買い足していけばいい。

楽しい買い物もあつという間に終わり、あとは自分の家にある荷物をまとめることになった。

洋服や小物や本ぐらいだから、1日もあれば十分に荷物はまとめられる。

冷蔵庫が配達される時には、部屋にいないてはいけなから……明日が引越しの日？

慌ただしくて寂しがる時間もないかとも思つたが、夕食の時に、

「明日には荷物が届くから、もうそのまま、あちらに住むことになると思う」

と両親に告げると、父と母の手が止まった。

「そう……」

と母がつぶやき、父は……。

目が潤み始めていた。

「えっ……」

私がびっくりしていると、父は涙を隠すように立ち上がり、部屋を出ていってしまった。

そして残った母が私の隣にやってきてくれて、黙って抱きしめてくれた。

「頑張るのよ。気をつけて」

「……はい」

二人に愛されて育てられて、私は本当に幸せでした。

嫁ぐわけではないけれど、私もちょっと泣けてしまった。

そして、翌日。

私は母に車で送ってもらい、多くない荷物を持って新しい部屋に到着した。

「おはようございます」

すでに先に来ていた誠さんが、私と母に挨拶してくれて、3人で荷物を運んだり掃除をしたりして準備を整えた。

母は昼前には帰ってしまったが、そのあとで冷蔵庫や洗濯機が配達されたり、生活用品が届いたりで、おおよその準備が整った時には、あたりはすでに暗くなりかけていた。

「何とか形になりましたね」

「そうですね」

「夕食は外で食べて、帰りにスーパーに寄りますか」
「そうしましょう！」

私達はあたりの散策を兼ねて、ぶらぶらと歩くことにした。外は寒いが、握った手は温かくて、心がほくほくする。

お腹が空いていたからか、二人そろって何となく豚カツを食べた。少し古いお店だったが、お客さんもたくさん入っていて、味も抜群。

すっかりお腹がいっぱいになって、満足して店を出た。

「いいお店でしたね」

「美味しかったです。他にも、いろいろお店がありそうですね」
「また今度、ゆっくり歩きましょう」

これからはしばらく散策が、ふたりの楽しみになりそうだ。スーパーも少し歩いたが、広いお店がある。

そこで、生活に必要な食材や飲み物を購入して帰路についた。

自転車ぐらいは買ったほうがいいかな。
それとも、家を持ってこようかな。

私はそんなことを考えながら、二人でたわいもない話を交わしている時間を、とても幸せに感じていた。

部屋について冷蔵庫に食材を収めると、ひとつの難問がやってきた。

それは、お風呂に入ること。

誠さんもそれに気づいて、何となく挙動不審だ。

「まどかさん、先にお風呂どうぞ」

「私は少し長いですから、誠さん先にいいですよ」

「いや、少し本を整理していますから、どうぞ入って下さい」

それじゃあ、先に入ろうかな、と思ったときに、いたずら心が芽生えてしまった。

そうだ、これを言わなくちゃ……。

「それとも誠さん、一緒に入りますか？」

私は誠さんが断ることを解っていないながら、にこやかにそう聞いてみた。

「あつ、えつ、その……」

ああ、うろたえている、うろたえている。
可愛いなあ……。

「どっ、どうぞ一人で入って下さい……」
「はあい」

グロッキー寸前の誠さんを見ながら、パジャマを用意してお風呂場へ向かった。

バスタブに湯をはり、ゆっくりと髪と身体を洗う。

ちょうど良い湯加減と量になったのを確認して、中に入った。

ああ……生き返る……。

今日は1日慌ただしかったから、いつの間にか疲れが溜まっていた。

それが温かい湯と共に流れ出してくれるような心地良さだった。

いよいよ二人の生活が始まったんだ……。

私はここでようやくそのことを実感した。

何となく嬉しくて楽しくて、胸がほんわかと温かくなる。

不思議だな。

数年前までまったく知らなかった人と、二人で生活することになるなんて。

これからどんな毎日になるのだろう。

ケンカもするかも知れない。

でも、きっとすぐ仲直りをするだろう。

苦しいこともあるかも知れない。

でも、二人でならば乗り越えていけるような気がする。

誠さんの、役に立ちたいな。

初めての夜

「お先に失礼しました」

「いえ。では僕も入ります」

「はい」

私と入れ違いに、誠さんがお風呂に入る。

私はドライヤーで髪の毛を乾かすことにした。

何となく、みんなで海旅行に行った時を思い出す。

あの時も、誠さんと同じ部屋でドキドキしながら、髪を乾かしていたな。

今は、あの時ほど緊張はしていないし、安心感もあるけれど。

そつと、隣の部屋を見ると、仲良く並んだ布団が2組。

ひとりで眠ることになった私が、今日は眠れるかな……。

眠っているから知らないけれど、私、イビキとか歯ぎしりとかないかな。

別の部屋で寝ましよう、とか言われたらどうしよう。

それに、やっぱり、その……エッチとかに、なるのかな。

うわぁ、胸が急にドキドキしてきた。

静まれ！ 心臓！

先走ってどうする！

キスとハグしかしたことがないから、こればかりは不安だな…

…。

経験も知識もないし。

お任せしたらいいのかな。

待っていたら、何も無かったりして。

……誠さんならあり得るな……。

私から襲う？

いやいやいや。

いつの間に肉食系女子になってしまったんだろう……。

「お待たせしました」

「はっ、はい！」

いつまにか誠さんがお風呂から出ていた。

妄想している間に、そんなに時間が立っていたとは。

青いパジャマ姿の誠さん、何となく可愛い。

いつかお揃いのを買いたいな。

「はっ、早いけど。寝ましようか」
「そっ、そうですね」

二人でどもりつつ、一緒に部屋の電気を消して、それぞれの布団に入った。

あたりがしんつ、と静かになる。
耳をすますと、冷蔵庫のモーター音がわずかに聞こえるぐらいで、何となくふたりの呼吸の音まで聞こえてきそうだった。
目が暗闇に慣れると、部屋様子や隣に眠る誠さんの姿が見えてくる。

ああ、本当に一緒に寝るんだ。
何か不思議。

私は独り言のように話し始めた。

「何か不思議ですね」

誠さんもまだ寝ていなくて、聞き返してきた。

「何がですか？」

私は視線を天井に向けたまま説明を続けた。

「父から同棲を勧められて、まだ10日ぐらいですよ。二人で一緒に寝ているなんて」
「ああ、そうですね」

同じように天井を見ていた誠さんがこちらを顔を向けた。

「急ぎすぎましたか？」

「いえ、そんなことはないです。楽しみにしていましたし」

「僕もです。一緒によかった……」

「ふふ、いつも一緒ですよ」

「はい」

しばらく沈黙が続く。

「まどかさん」

「はい」

「……隣に行っていていいですか？」

きたあああ！！

きました！

誠さん、頑張りましたね！！

「はい」

私は緊張と嬉しい気持ちを隠して、静かに返事してみた。

誠さんが私の布団の中に入ってきた。

それまで冷たかった布団がほんわかと温くなる。

それが嬉しくて、思わず私の方から誠さんを抱きしめてしまった。

「まどかさん……」

胸がきゅんつとした。

いつまでたっても、恋してるなあ……私。

好きですよ、誠さん。

そうして私たちは、暗闇の中でキスをした。

初めての朝（R15）

翌日の朝、私はひとり目が覚めて、そっと布団から出た。
起こさないように、そおーっと。

うう、可愛い寝顔。

キスしたくなるけれど、今は我慢。

私は脱いだ下着とパジャマを着て、台所へ向かった。

昨晚、私達は抱き合いました。

いやあ……気持ちよかったです。

誠さん、予習しましたね。

絶対。

お互いに初めてのはずなのに、とても良かった。

とにかく優しく、ゆっくりと触ってくれた。
全身くまなく。

耳とか指先とか、背中とかが気持ちいいなんて、知りませんでした。

優しいんです、手先が。

気持ちよさの中で溺れて、生まれて初めて感覚に、私は何が起きているのか解らなくて。

気持ちいいというよりも怖くて、動かす手と舌を止めてもらった。

誠さんは優しくキスし、「多分イキそうになっているんです」と説明してくれてようやく私は落ち着くことができた。

ちよつと流れた涙をすくってくれて、「再開してもいいですか？」と聞かれ、私はうなずいた。

あの時の感覚を思い出すと恥ずかしいというか、疼くというか。

意識が飛ぶかと思いました。

まったく……。

そうすると、当然最期の行為があるわけなのですが、これは、私が痛がってしまって、中断となっていました。

「痛いのはしょうがないから、気にしないで下さい」

と言ったのだけれど、誠さんは、

「少しずついきましよう」

と譲らなくて、指だけで終わってしまった。

優しいのはいいけれど、もっと我を通してもいいのに。

当然、誠さんは不完全燃焼だから、

「手伝います」

と言ったら、また昔のように拒否された。

「いいですから。私ばかりじゃ嫌なんです」

とこねたら、しぶしぶ了解してくれた。

それで、丁寧にやり方を教えてもらったわけなのですが……………。

あー、うん。

拒否された理由がわかりました。

いやあ、男の人ってこうなっているのね……………知りませんでした。

初めてのことはかりで、びっくりな夜でした。

私はエアコンの暖房を入れて、お米を研ぐことにした。

せつかなので御飯とお味噌汁、それにだし巻き卵でも作りましよう。

このぐらいは役に立たなくちゃ。

ご飯をセットして、お湯を沸かして……………っと。

でもなあ、本当に誠さんにはもっと、「俺はこうしたいんだ!」
という気持ちを持って欲しいし、私には遠慮しないで欲しい。

誠さんが遠慮していると、私まで遠慮してしまいそうで。

それは長続きしないような不安がある。

ケンカになったっていいから、思いをぶつけて欲しい。

何か役に立てないかな……。

私はお味噌汁の具を切りながら、そんなことを考えた。

ん？

そうだ。

ちょっと恥ずかしいけれど、あれをやってみよう。

たぶん……いやきつと喜んでくれるはず。

私はいたずら心もあって、ちょっと用意をしてみることにした。

隣の部屋で、誠さんが起きた音がする。

よしよし、こちらも準備完了。

お味噌汁の匂いを漂わせて、包丁の音なんかさせて……と。

「お早うございます。すみません、よく寝てしまっ……」

扉を開けて、誠さんが入ってきた。

ちよつと寝ぼけ眼が可愛い。

私の姿を見て、固まっている。

ふふ、どうだ。

恥ずかしいけれど、喜んでいただけましたか？

「誠さん、お早うございます。顔を洗ってきて下さい。もう朝食の準備ができましたから、一緒に食べましょう」

「あつ、はい……」

戸惑ってる、戸惑っている。

誠さんは頭をかしげながら、顔を洗いに行った。

実は私、裸にエプロンを試してみた。

男の人は絶対に好きはず。

二人つきりじゃないとできないサービスだ。

……恥ずかしいけれどね。

顔を洗っていつもの顔にもどった誠さんが、あらためて私のことを見ている。

ちよつと顔を赤くして、ちらつ、ちらつ、と。

昨夜、見たじゃないですか。
たっぷりと。

「はいはい。誠さん、座って下さい」
「はっ……はい」

誠さんの背中を押して、席に座らせる。
私はもちろん、その向かい側に座る。

視線が胸元に来ています。
うん、でも喜んでいるぞ。間違いなく。
よしよし。

恥ずかしいけれど、やった甲斐がある。

「どうです？ この姿。嬉しいですか？」
「えっ、えっ、その………はい」

よっしゃー。

「でも何で……」

私達はとりあえず、いただきます、をして食事を食べ始めた。
温かいうちに食べないとね。

「誠さん、優しいのはいいんですけど、私にはもっと遠慮しないで欲しいんです」

「遠慮、ですか？」

「はい。もっと『俺はこうしたいんだ！』っていうのを、私のことは気にせずぶつけて欲しいんです」

「こうしたい……」

「はい。私は誠さんの役に立ちたいし、遠慮して欲しくないし、やりたいことを一緒に楽しみたいんです」

「……いいんですか？」

「はい。何でも言っして下さい！ 受け止めます」

「何でも？ その……嫌いになりませんか？」

「なるもんですか。さあ、どうぞ！」

よし言えたぞ！

やっぱり思いは伝え合わなくちゃね。

誠さんはしばらく戸惑っていたようだけど、箸をおいて私の方を見た。

「まどかさん」

そう言っつて、誠さんは立ち上がった。

あれ……？

何か変だぞ。

何したいのかを、伝えてくれるものとばかり……。

……もしかして私、地雷を踏んだ？

誠さんはゆっくり机を回りこんできて、私の横で立ち止まった。そうやって私はようやく現状を理解した。

そっ、そうよね。

裸にエプロンで、好きなようにして！　って叫んだら、普通そういう意味よね。

わああああ、地雷踏んだ！

しかも、おもいつきり天然につっ！！

誠さんが座っている私を上から抱きしめる。

「まどかさん……いい？」

ぞわつとききました！

耳元で囁かれて、背中に何かが走りました！

ちっ、力が抜ける……。

「はい……」

私はそう答えるのが精一杯だった。

朝からですか！

外からちゅんちゅんって、小鳥の鳴き声が聞こえてますけど。窓から爽やかな朝の光が差し込んでいますけど。

いや、誘ったのは私からみたいなのですから、言い訳はしません。

誠さんの手が私の顔を上げて、ゆっくりと柔らかな唇が近づいてくる。

私は思わず目を閉じて、その唇を受け入れた。

ちゅっ……。

それだけで、全身がじんと痺れてしまう。

あっ、もう……。

朝からすっかり捕獲されてしまった。

淡々とした毎日

二人の生活は心配していたほどの問題はなく、むしろ淡々と毎日が過ぎていった。

朝起きて、私は軽くジョギングをするのだが、最近は誠さんも一緒に走っている。

シャワーでざっと汗を流すと、二人で朝食を作り、食べる。学校に行き、勉強をする。

帰ってきたら一緒に洗濯や掃除をして、夕食の準備をする。

食べ終わったら、やっぱり一緒に後片付けをして、お風呂に入るまでの間、勉強をする。

そして、眠る。

ある意味、とても単調な毎日。
それが何故か、とても楽しい。

もともと家事をすべてやっていた誠さんなので、私がむしろ教えてもらいながら一緒に手伝っている感じ。

一緒に食事を作ったり、掃除をしたり。

役割分担なんて無くて、とても自然に二人でやっている。

部屋も広くないので、それほど負担もなくすぐに終わってしまう。

何が楽しいかというと、例えば食事を作ること。
これが科学の実験のようで楽しい。

ある時、大根を一本買った。

葉っぱまで付いている大きなもの。

こんな大きなもの、ふたりでどうやって食べるのだろう、と心配していたら誠さんが笑って教えてくれた。

「大根って、部位によって味が違うって知ってました？」

「そうなんですか？」

「先は少し辛めで擦りおろすのに適していて、太い方は甘めで煮物に適している。葉っぱも美味しく食べられるんですよ」

そうして、大根はお魚の薬味として擦りおろされたり、雪見鍋としてふわふわにかけられたり、煮物にされたり、お味噌汁の具となったり、葉はごま油で炒めたり。

あれだけ大きかった大根が綺麗に無くなった。

部位や料理方法でこんなに美味しくいただけるなんて、ちょっとびっくりした。

もう一つ驚いたのは、煮物について。

大根を煮物なんてよくある料理なのに、本のレシピを調べてみるとそれぞれに書いてあることが違ったりする。

「いろいろ試してみると面白いですよ」

と言われて、試してみると、確かに微妙に違う。

これがそれぞれの家庭の味になっていくのだろうか。

それに、本の通りだと大根の中まで味が沁みてなくて不満を感じ、

「もう少し煮た方がいいんですか？」

と誠さんに聞くと、

「少し寝かしておく煮崩れもしなくていいですよ」

と言われ、冷蔵庫に一晩置いておいたら、朝には芯まで染みていてびっくりした。

大根ひとつで、こんなに学ぶことがあるなんて。

「水上勉さんの『土を喰らう日々』という本があつて、その中に捨てようと思った形の悪い小さな大根にもぴりりとした味があつて、こんな小さな中にも仏があつたと書いてあります。食事を作ること、食べることも、極めれば道になるんですね」

誠さん、深いです。

私は食事を作ることがだんだんと楽しくなつていった。

掃除や洗濯もそうだった。

これも調べてみると、いろいろなやり方がある。

それだけで一冊の本になっていたりして、思っていたよりも深いようだ。

どうすればより綺麗に出来るか、より時間を短く出来るかを検討していたりして、まるで勉強をしている時のようだ。

少しずつやり方を変えてみて、調べてみて、試行錯誤をして。

汚れを落とす洗剤を吹きかけてすぐに拭いていたら、

「何分ぐらい置いておくのが一番綺麗になると思いますか？」

と聞かれてびっくりした。

試しに、すぐに拭きとる、1分、2分、3分……と分けてやってみたら、3分ぐらいが一番綺麗になった。

ゴシゴシなくても拭きとるだけで良いので、手間もかからない。

きつと化学反応の時間が必要なんですネ。

うん、思っていた以上に周りには勉強が溢れている。

誠さんは、物を買うまでにとっても吟味する。

買うまでの過程を楽しんでいるというか、買うまでにいろいろと想像して喜んでいるというか。

そうして買わないものも多いので、あまり物が増えない。

そしてあるものをとて大切に使う。

私のこともそうやって選んで、大切にしてくれているのかな。

そう思ったら、何となく嬉しかった。

淡々とした毎日も、楽しさはそこら中に散らばっていて、飽きる

ことはない。

こんな日々がずっと続くといいな、と私は本気で思っていた。

散歩

土日や祝日は、周囲の散策に出かける。

歩いて回れる範囲でもけっこう知らない場所、楽しい店があったりして飽きることがない。

最近は携帯電話をスマートフォンに変えて、写真をとったり、記録したりすることもある。それが溜まっていくのが何となく楽しい。

二人で可愛い猫や犬の写真を撮ったり。

塀の上や道端で座り込んでいる猫がいて、ちょっとドアップで撮ったりする。

できた写真を二人で眺めて、こうして撮るともったいいかな、とか話したり。

空の色は毎日違って、特に夕暮れ時は格別だ。

誠さんは黄金に光る雲が好きだといい、私は深くなっていく空の青さが好きだと言う。

「だって、だんだんと深くなる青って素敵じゃないですか？ ふとすると星が見えたりして」

誠さんは笑ってうなずいてくれた。

「宵の明星だ」

指さした先に、ひときわ光る星を二人で眺めた。
暮れゆく空に、ただひとつの光点。

本当に綺麗だな、と思ったのに、ふと風に乗ってきた揚げ物の匂いがとっても美味しそうで、お腹が鳴ってしまった。

それがあんまり大きな音だったので、二人で大笑いしたりして。

なんだろう。

何でこんな些細なことに幸せを感じてしまうのだろう。

何となく夕暮れどきって切なくて。

寂しいかな、と思っていると、誠さんが「じゃあ、帰ろうか」と言ってくれる。

それだけで、心がほわっと温かくなって、寂しさが消えていくなんて。

あなたは何者ですか？

私も、あなたにとって、そんな存在でありたいです。

「ああ、本当に祝婚歌の意味が解るなあ」

私は以前に教えてもらって詩が頭の中によみがえり、思わずそうつぶやいてしまった。

「そうですね。解ります」

誠さんはそう言つて、祝婚歌を暗唱してくれた。

「……立派でありたいとか、正しくありたいとかいう、無理な緊張には色目を使わず」

私も言葉を続けた。

「ゆったり ゆたかに、光を浴びているほうがいい」

光、大事です。

人間も光合成しなくや。

もう落ちかけている太陽の光を体いっぱい浴びて、私は大きく伸びをした。

パシャッ。

「あつ、撮りました？」

「撮りました。素敵なワンシーンだったので思わず」

「私の伸びをしている姿が？」

「はい。良かったです」

「どれどれ」

「ほら」

濃い青の空をバックに、夕暮れ色に染まる私の顔は、どこか幸せそうだった。

ああ、いまこんな顔をしていたんだ……。

「まあまあですね」

「被写体がいいから」

「景色が良かったということに」

誠さんが笑った。

その笑顔、思わず私も一枚撮りたくなった。

「夕食は何にしましょう」

「なんでしょうね。鰹のタタキとか？」

「あっ、いいですね！ ニンニクも乗つけたい」

「じゃあ、スーパーに寄ってから帰りましょう」

「はい！」

私達は手をつないで、歩き始めた。

誠さん、私、幸せです。

夜のこと（R15?）

夜の営みについて。

初めての日から、まあその……ほとんど毎日あるのですが。

私達のは、おそらくちょっと他と違うところがある。

何が？ ……というと、私達はよく「反省会」と「勉強会」をしている。

反省会というのは、その行為の後で、どうだったかと互いに質問する時間がある。

私としては最初「良かったですよ」の一言だったけれど、どうも誠さんはもっと細かく聞きたいのだという。

何故かといえば、

「どう感じたかは、まどかさんしか解らない。独りよがりにならないくないんです」

と相変わらず優しいことを言ってくれる。

こんなところまで勉強家の誠さんは、毎回少しずつ違うことを試してくれる。

触ったり、揉んだりするだけでも、よくまあこんなに色々あるものだと感じているのだけれど。

それがどうだったのか、誠さんとしては気になるらしい。

反応でいくらか解るが、言葉で確認したいとのこと。

恥ずかしいことは恥ずかしいけれど、

「えーっと、手の平で触られるのもいいのですが、指先で優しく触れられる方がもっと良かったです」

とか、

「先を刺激されるのが一番気持ちいいのですが、別のところもそれぞれに気持ち良くて、どれもやってほしいです」

と説明したりする。

身体を使ったコミュニケーションと言うか、互いに身体が発する意味を理解することを重ねていくうちに、だんだんと言わなくても望んだことをしてくれるようになって。

何というか、とても満足度が高くなっていく。

反省会、大きな声では言えないのですが……………お勧めです。

そして、もう1つが勉強会。

当初はどうやって新しい知識を仕入れているのか不思議だったけ

れど、ここは1つ素直に聞いてみた。

「誠さん。夜のこと、どうやって勉強しているのですか？」

誠さんは初めとても恥ずかしそうにしていたけれど、本とかインターネットとかDVDとか、いろいろと教えてくれた。

いや……勉強家ですね。

で、一緒に勉強することになった。

最初に医学の解剖書から始まったのは、我々らしいというか。

ここから入るのですね……。

ええ、詳しくなりましたとも。

それに、やっぱり深いというか。

「男性はなんで……その……胸を見たり、触りたいと思うのですか？」

「もともと動物としては性行為を促す刺激として、おしりの膨らみや色があったようなんです。それが人間が二足歩行で歩いて、向かい合うことで、おしりの代わりに胸がその役目になったと言われています。つまり本能的な刺激なんです」

なるほど……。

「それで、胸を揉んで、男の人は何が気持ちいいんですか？」

「本能的な刺激が充足されたことによる気持ちよさ、相手が気持ちよく感じていることが伝わる気持ちよさ、その先の行為が許されたという期待感・征服感、それに純粹に柔らかいという感触でしょうか」
「……誠さんが話すと、いやらしく聞こえませんか」

本当に、勉強会なんです。

「男性はかなり視覚的刺激で、快感を得ています」

「というと？」

「男性が女性の身体に触れるのがメインで、女性が男性の身体に触れる割合って少ないですよ」

「そうですね。それで、いつも私ばかり……と、申し訳ないような気持ちになるのですが……」

「男性は女性が気持ちよく感じているのを、視覚的に見ることで、快感を感じているのです。快感が伝わるというか」

「そうなんですか？」

「だから、あまり一方的だと感じなくていいんです。自然体で感じてもらえると、そのままこちら気持ちいいんです」

誠さんだけでも知れないけれど、私はそう説明されてとても安心した。

やっぱり、話し合わないと解らないことって多いな。

真面目な本やDVDもけっこうあって、「じゃあ今度は、これを試してみましようか」と言うのも、意外に楽しいもので。

ただいわゆるAVというものには閉口した。

「これは、嘘ですね」

「やっぱりそうですか？」

「男性視点なんでしょうね。女性は演技しているとしか思えない。私の経験が少ないからかも知れませんが」

「例えば？」

「あんなに声は出ません」

「なるほど。あんなに声が出ていなくても、心配しなくていいのですね」

「確かに声は思わず出てしまいますが、あれは演技だと思います」

「他には？」

「激しくよりも優しくのほうが絶対いい！」

「あっ、なるほど」

「画像的には刺激にならないから、激しくしているのでしょけど。きつと痛いばかりです。それと……」

「それと？」

「前戯は大切です。焦ってはいけません。女性の身体は時間がかかるのです」

AVで勉強されて勘違いされては、相手はきつとたまらないだろう。

まあ、それで喜ぶ人もいるのかも知れないけれど。

そして、もう一つ不思議なのが、だんだんと感覚が変わること。

今までそれほど気持ちが悪くなかったものが、気持ちよくなったりする。

何というか、感覚にもステージがあるというか。少しずつ階段を登る感じに近い。

きっと男性にとつては狩りであったり、一夫多妻の本能であったりするのだろうけど、一度だけの関係で終わりというのはもったいない。

重ねること、互いに楽しめることは広がっていくことを知ってほしい。

ひとりの人と解り合うことは、一生かかるほどに深い。

それは、これからも続けていきたいという原動力になるし、もっと知りたい、知ってほしいという刺激にもなる。

他人が家族になっていくのはたくさんの時間を必要として、それはけっこう大変なことだけど……………私はこう思う。

けっこう楽しいぞ、と。

風邪

風邪を引いてしまった。

ここのところずっと病気知らずだったので油断をしていた。

どこでもらってきたか解らないけれど、私は久しぶりの高熱に戸惑っていた。

「とにかく、しっかり寝ていて下さい。お昼はお粥を作っておきましたから、食べて下さいね。何かあったらいつでも電話下さい。駆けつけますから。あとはえーっと」

今日は平日で、誠さんは学校へ行かなくてはいけない。

最初は、

「一緒に休みます」

と誠さんが言い始めていたが、

「私のせいで休まないで下さい。大丈夫ですから。私の休んだ分、ちゃんとノートを取っておいて下さいね」

と言って、なだめた。

役に立ちたいのに、私が誠さんの足を引っ張りたくはない。

誠さんは心配そうな表情をしながらも、納得してくれた。

ちょっと過保護になっている誠さんを、授業に遅れないように送り出す。

「じゃあ、行つてきます。なるべく早く帰つてきますから」
「はい。誠さんも気をつけて」

私はベッドの中から、誠さんに声をかける。
ちよつと咳が出てしまい誠さんの足がまた止まるが、私は手だけで早く行くように促すと、ようやく出て行つてくれた。
扉の重たい音が響くと、本当に一人きりになってしまった。

「はあ……」

私はため息をついて、天井を見つめた。

体の芯が熱くて、ぼーっとする。
だるくて、食欲もない。

駄目だなあ……体の管理ひとつできないなんて。

私は小さな咳をして、早く治すべく、もう一度眠りについた。

ふっ、と目が覚めたのは昼少し前。

3時間ぐらいは眠れたのかな？ それでも、身体はまだまだ辛くて、熱もむしろ少し上がったかも知れない。

朝はりんごジュースしか飲んでいないので、何とかちよつとは食べない。

重たい身体を起こして、私は台所に向かった。
そこにはきちんとお昼の用意がしてあった。

炊飯器のお粥をよそい、ラップをかけてある梅干しと塩昆布と一緒に食べればいいらしい。

食欲はないけれど、早く治したいし、心配をかけたくない。

私は何とか茶碗一杯のお粥をゆっくりと食べた。

お粥に何となく誠さんの温かさを感じた。

もう一度、布団に横になるが、もうさすがに眠気が来ない。
やれることもなくて、じっとしていると、嫌なことばかり考えてしまう。

このまま風邪が悪くなつて、肺炎になつて死ぬのかな……。

誠さんがいない間に、死んだら嫌だな。

でも、誠さんだつたら一人で何でもできるから、私がいなくても困らないだろうし。

私なんていてもいなくても、一緒なんだろうな。

それで、私がいなくなったら、誠さんも誰か他の人と一緒になるのかな。

嫌だなあ……でも、しょうがないよね。

あつ、いけない……涙が出てきた……。

泣く資格もないのに。

こんなじゃ誠さんの役に立つどころか、迷惑ばかりだ。
私の方から、いなくなった方がいいのかな……。

でも、嫌だな……離れたくないよ……。

ああ、涙が止まらなくなってきちゃった。

もういいや。

しばらく泣こう。

思考が悲観的になっていることは解っていたが、止めることもできなくて、私はしばらくそのまま流れに任せることにした。

どうしてこんなに不安になってしまふのだろう。

今まで健康だったから、風邪を引いて不安定になっているのかな。

最近は家でも学校でも誠さんと一緒だったから、離れているのが寂しいのかな。

でも、これから働き始めたら、そうそう一緒というわけにもいかない。

風邪とは言っても、少し離れているだけで不安になる関係は良くない。

それぞれが自立して初めて、相手を支えることができるのではないか。

私は、そう思う。

どうすれば、この不安とか、寂しさを克服できるのかな。

きっと自分にもっと自信をつけなくちゃいけないのだろう。

もっと、頑張らないと。

私はとにかく早く風邪を治したくて、ぎゅっと目をつぶった。

寝たり起きたりを繰り返して、長いような短いような時間を過ごしていたら、誠さんが帰ってきた。

時間を見ると、本当に授業が終わったらずくに帰ってきたようだ。

申し訳ない。

「まどかさん、大丈夫ですか？」

「はい。まだ熱はあるけれど、朝よりはいいです」

誠さんが私の額に手をあてた。
ひやりとして気持ちが悪くて、私は思わず目を閉じて、その手の
感触を味わった。

「まだけっこう熱がありますね。食欲はありますか？ お昼は食べ
ましたか？」

「あまり無いけれど、昼は食べました」

「そうですか……あの、みかんの缶詰とか、桃の缶詰って食べます
か？」

「はい？」

缶詰？

「いや、僕がむかし風邪をひくと、母がみかんや桃やパイナップル
の缶詰を食べさせてくれて。冷たくって甘くて、何故かそれだけは
食べられたんです」

「そうなんですか」

私は身体を起こしてみた。

まだ重たいけれど、いくらかいいようだ。

「食べてみます」

「はい。いま用意しますね」

用意といっても、缶を開けて器に移すだけなので、誠さんはすぐ
に戻ってきた。

スプーンでみかんの一房と汁を一緒にすくって、口元に持ってきて
くれた。

いわゆる、あーん、というやつで、私は「自分で食べます」という言葉が喉元まで出かったが、誠さんの真面目な顔を見て、今は甘えることにした。

「あーん」

開いた口に、スプーンが入る。

あむ。

うん、確かに冷たくて甘くて、美味しい。

「美味しいです」

「良かった」

誠さんはほっとした表情を浮かべていた。

何か、誠さんの優しさが胸にぐっと来たが、涙は何とかこらえた。

「自分で食べます」

「うん」

私は誠さんから器を受け取って、何度かみかんを口に運んだ。

なぜか、最初の一口が一番美味しかった。

もう少し、甘えとけば良かった。

いやいや。

桃の缶詰も持ってきてくれたが、さすがに全部は食べられなくて、

残ってしまった。

それでも、私が食べたことで、誠さんはほっとしてくれたようだ。

「また少し休んでいて下さい」

「はい」

そういうと、誠さんが部屋を暗くしてくれて、隣の部屋で自分の食事を作り始めた。

手伝いたいなあ、と思っても、いま動いたら迷惑を掛けるだけだ。それに、誠さんはひとりでも料理ができる。むしろ私よりも上手だ。

あつ、また、ネガティブになりそう。

いけない、いけない。

私は考えるのをよした。

寂しいよ

誠さんは食事を食べた後、いつもより早めに勉強を切り上げてお風呂に入り、パジャマに着替えて、また私のところにやってきた。そのまま隣の布団に入り、そつと頭を撫でてくれた。

うわっ、心地良い。

いけない。

優しさに負けそうだ。

「あの、誠さん。風邪をうつすといけないから、今日は別に寝ましよう」

「え……？ 大丈夫ですよ。うつされてもいい」

「そうはいきません。私は誠さんの役に立ちたいのです。足を引っ張りたくない」

「……」

「お願いです」

誠さんは一度二度口を開き反論を試みようとしていたが、そのまま口をつぐみ、

「解りました」

と言った。

布団をたたんで、移動を始めると、私がお願いしたことなのに、

本当にいつちゃうの？！

と心の中で叫んでしまった。

その気持ちをぐつと我慢をして、誠さんが隣の部屋に移っていくのを、ただ黙って眺めていた。

強くならなくちゃ。

私はそう、心の中でつぶやいた。

誠さんが部屋の電気を消すと、あたりがいつぺんに暗くなる。

「おやすみなさい」

少し遠くから聞こえる声に、私も「おやすみなさい」と返した。

そして、広がる静寂。

すぐそこに誠さんがいるのに、何となく広い宇宙に放り出されたような孤独感が襲ってきた。

たくさん眠ってしまったから、まだ全然眠くなくて。

真っ暗で、物音ひとつしない中で、ただ布団にくるまってじっとしていることが、ひどく辛くなってきてしまった。

私はじわつと溢れてくる涙を抑えることが出来なかった。

何とか声を出さずに泣いていたが、咳が出た拍子に、鼻をすすつてしまった。

「ぐすつ……」

いけない、と思った時には遅かった。

がさつと、誠さんが身体を起こす音が聞こえる。

少し戸惑いの沈黙の音、誠さんが聞いてきた。

「まどかさん……泣いているの？」

やっぱりばれてしまった。

でも今ならまだ挽回できる。

私は、大丈夫、と答えるはずだった。

でも、出てきた言葉は、

「……寂しいよ……」

だった。

ああ、情けない。

とうとう言ってしまった。

でもいつの間にか、心が我慢の限界を超えてしまったらしい。

抑えることも出来ずに涙が溢れて、私はすすり泣きをしてしまった。

誠さんがやってきて、私の頭をゆっくり撫でてくれた。

その温かさに、また涙が止まらなくて。

どのぐらい、そうしていただろう。

いつもだったら疲れて眠ってしまいそうぐらい泣いたのに、今は心がすっきりして、風邪まで治ってしまったように頭の中は澄んでいた。

涙も鼻をすするのも止まり、私は暗闇の中に佇む誠さんの瞳をじっと見ていた。

優しく、慈しむような瞳。

何でこんな私に、そんな目で見てくれるのですか？

私は……。

「迷惑ばかりかけて御免なさい」

小さな声で、そうつぶやいた。

誠さんはゆっくりと首を横に振った。

「迷惑なんて、ひとつもかけていない。何も」

「そんな。だって、今だってこうして」

「嬉しいんです」

「えっ？」

「頼ってくれて、寂しいって言うてもらえて、嬉しいんです」

「……………」

「まどかさんに幸せにしてもらってばかりで、僕は何も返してあげられなくて。時折、僕はいなくてもいいのかな、と心配になるのです」

「そんなこと！」

「今日も『大丈夫』と言われたり、『一人で寝る』と言われたり。そうじゃないと解っていても、拒否されたように寂しくて」

あつ、私と……………同じ……………。

何となく嬉しくて、私はじわっと涙が滲んできてしまった。

「だから、寂しい、って言われて、僕は嬉しかったんです」

誠さんが私の涙をすくってくれる。

私はただ、うん、うんとうなづくことしか出来なかった。

「もっと頼って欲しい。僕もあなたの役に立ちたいのです」

胸がぐつと締めつけられる。

私はしぼり出すようにしか、声が出せなかった。

「誠さんは……そこにいるだけで……私の役に立っています」

「……………」

「生きているだけで、側にいてくれるだけで」

誠さん……愛しています。

誠さんが優しくキスをしてくれた。

「僕もです。僕にとって、まどかさんは、同じような存在です」

「本当に？」

「本当です」

「信じて……いいですか？」

「信じて下さい」

私はほっとして、深い溜息をついてしまった。

「良かった……」

緊張していた身体から、力がゆっくりと抜けていく。

そうしてようやく眠気が訪れてきた。

「やっぱり横で寝ますね」

「はい」

誠さんが布団を戻して、いつもの位置で眠ってくれた。

寝づらいとは解っているけれど、私は思わず手を伸ばしてしまつて。

誠さんも同じように手を伸ばして、私の手を握ってくれた。

私はようやく安心して、深い眠りにつくことができた。

誠さん、本当に、有り難う。

それは深い、本当に深い、眠りだった。

自立

とある日曜日。

初めて曜子が部屋を訪れてくれた。

曜子とは大学で会ったり、電話をすることはあったけれど、部屋に上がってもらうのは今回が初めてだった。

引越した後すぐに声をかけたのだが、

「新婚生活のお邪魔をしたくない」

というわけの解らない理由で、曜子のほうが断っていたのだ。

「そろそろ落ち着いたかな」

とか言いながら、曜子が遊びに来てくれた。
両親を除けば、初めてのお客さんだった。

「お邪魔します」

「どうぞ」

部屋の中で誠さんが招き入れてくれた。

曜子は靴を脱いで中に入り、ぐるっとあたりを見渡す。

「へえ、広くて綺麗で、いい部屋ね」

「ありがとう」

私はお茶を用意するべく、台所に立った。

ちなみに、二人の好みで緑茶かほうじ茶か、あっても中国茶。今日は香りの素晴らしい凍頂烏龍茶を淹れることにした。

曜子は興味津々にいろいろな所を見て回っている。

と言っても、私達はあまり物を買っていないから、大して見られるものも無いけれど。

「うん。シンプルで二人らしい暮らし方をしているね。落ち着いた雰囲気がある」

「想像通りだった？」

「そうね、だいたい。で……」

「で？」

「二人でどうやって寝ているの？」

「真面目な顔でいきなり聞かないで……」。

「やっぱり聞くの？」

「聞かれると思っていた？」

「うん」

「では、期待に込めてもう一度。二人でどうやって寝ているの？」

期待していませんから。

「隣の部屋に、布団を並べて」

「布団をくつつけて？」

「……………」

「白い目で見ないでよ。二人がちゃんと同棲生活を送っているのか、心配しているの。下手したら、結婚するまでは、とか言っただけに寝ていて、誠も手が出せなくて、まどかも待つてばかりとか」

「……なかなか鋭い読みですね」

曜子の問いに、誠さんのほうが答えた。

鋭いんだ。

ということは、誠さんもそう思っていたフシがあると。
初日に襲ってきたくせに。

「まさか……まだ、とは言わせないわよ」

曜子と誠さんが、真剣な顔で見つめ合う。

何ですか、この緊張感は。

私はそつと二人の前にお茶を置いた。
さて、次はお茶菓子だ。

「初日に、頑張りました」
「……………」

誠さんの言葉にしばらくの沈黙の後、曜子が、うんっ、と力強く
うなずいた。

「よくやった」
「師匠。有り難うございます」

二人とも、どういう関係ですか。

私は苦笑いしながら、お茶菓子として羊羹を置いた。お茶には甘

いものよね。

「もう二人の仲は磐石ね。私が心配する理由も無くなったわ」

私も椅子に座って3人でテーブルを囲んだ。

磐石、と言われて、私は先日の風邪の時のことを思い出した。

思っていた以上に不安定な気持ち。

相手に依存した幸せに、私はいまだにいくらかの不安を感じていた。

「ねえ、曜子。聞いてくれる？」

「何？」

「先日、風邪を引いた時のことなんだけど」

私はいつまでも風邪の時のことを説明した。

その時の不安な気持ち、寂しさ。

今はもうそんな気持ちも残っていないが、いつそれがまたやってくるかは解らない。

それに、誠さんの足を引っ張りたくない気持ちは、今も変わらない。

まとまりはないが、自分の感じた思いの流れをそのまま話した。

曜子も誠さんも、静かに私の話を聞いてくれた。

話し終えた私に、曜子はこう答えてくれた。

「それでいいんじゃない」

「……え？」

「私はそれでいいと思うな」

曜子の言葉に、誠さんも少し意外そうな顔をしていた。
曜子は説明を続けた。

「確かに、イチャイチャし過ぎだと思っけど」

そこを言うか……。

「でも、そんなイチャイチャは子供が出来たり、働き始めたら落ち着いてくると思うから。いまは存分に甘えていいんじゃない」

「落ち着きますか」

誠さんが、曜子に聞いた。

「……二人を見ていると若干の不安はあるけれど、おそらく」

「おそらく、ですか」

「……多少は？」

だんだんトーンが下がっているし、疑問形ですか。

曜子が咳払いをひとつして、言葉を続けた。

「二人は十分それぞれが自立しているから、それぐらい足りない所があつて、お互いが必要とするぐらいがちょうどいいと思うよ」

「そうかな」

「結婚したら、また少し落ち着くでしょう。私から見たら鉄板のよ
うな絆だけど」

「結婚……か……」

何度となく意識し、何度となく聞いてきた言葉。

私は焦っているのだろうか。

同棲をはじめて、この生活がずっと続くといいな、と思う先に結婚が見えているのは確かだけど。

「曜子さんは、好きな人は出来ましたか？」

誠さんが話の方向を変えてきた。

それに対して、曜子は苦笑いをして答えてくれた。

「私は相変わらずよ。まだまだ本やテレビに恋する状態」

「でもこの前、男の人と二人で楽しそうに歩いている姿を見ましたよ」

あー、はいはい。私も見ました。

誠さんも、攻撃するようになったのね。

曜子は恥ずかしそうに笑った。

「ああ、あいつね。学部友達だけ」

「仲いいの？」

「好意は持たれているかも知れない」

微妙な表現だ。

「つまり曜子は」

「私は好きという気持ちにはなれない」

曜子は、はあ、と大きなため息をついた。

「本の中では恋愛して、妄想もできるのに。何故、現実ではときめかないのだろう」

「本の中で恋愛しすぎて、現実に対するハードルが高いとか？」

「あるかも知れないけど、意外に怖がっているのかも知れない」？

曜子の言葉に、誠が驚いた。

「曜子さんが怖い？」

曜子は苦笑いを浮かべる。

「他人のことはとやかく言えても、自分のこととなると臆病になるの。先を考えすぎるのも悪い癖だと解っているけれど」

確かに人を好きになると、その反対に臆病になる。

近づきたいのに、嫌われることの方が怖いから。

好きと思われない気持ちよりも、嫌いと思われない気持ちのほうで、大体的場合勝ってしまう。

本当は思っているほど嫌われることはなくて、もっと自然に好きになった気持ちを伝えて言っているのだから。

理屈で解っていても、心はなかなかそう動いてはくれない。

「その時が来るかどうか解らないけれど、私は心が動くのを待っている状態ね」

「そうなんですか……」

「だから、二人のことは応援しているし、尊敬もしている。いい恋をしてくれていると、私も励みになる」

人を勇気づけられる二人に本当になっているだろうか。

曜子の言葉は、1つ1つが二人の気持ちを癒し、温めてくれた。

そんな友人がいてくれて、私は本当に感謝していた。

その後も大学生活についてや、過去の話で盛り上がり、夕食を作って食べて。

遅くまで楽しく話をして。

結局その日は、3人で兄弟のように布団にくるまって眠ったのだ。
った。

プロポーズ

最近、誠さんの行動が落ち着かない。

ぼーっとしたかと思うと、落ち着かなく動いたり。

私の顔を見て真っ赤になったり、黙ってしまったたり。

といっても、原因は解っている。

私も同じ気持ちだから。

気づけば同棲から半年が経とうとしていた。

……そう、両親が設定した、結婚するかしないかの判定時期。

もちろん、必ずここで決めないといけない、と言うわけではないのだろうけど、「結婚」と言う2文字が私も頭から離れない。

私はもう心は決めている。

もし、誠さんにプロポーズをされたら、はい、と答えるつもりでいた。

一生を共に生きること、全く異論はない。

さあこいつ！ プロポーズ！！

……これで、誠さんに「結婚の決断はもう少し後にしましょう」とか言われたら、かなりヘコミそつだ。

思いは一緒だと願いたい。

ある日のこと。

「まどかさん、今日は外食しませんか？」

と誠さんに尋ねられた。

「いいですね。どこにしますか」

「実は予約してあるんです。用意していきましょつか」

あら、……もしかして？

かすかな予感と期待。

私達は着替えをして、食べに出かけた。
どこへ行くかは教えてもらえなかった。

「懐かしい店です」

と言われて、ひとつ思い当たる店があった。

きっと、そうだ。

そして今日、プロポーズをされる、と思った。

だって、その店は。

「着きました。ここです」

そこは確かに懐かしい店だった。

二人で初めてクリスマスイブをお祝いしたイタリアンレストラン。そしてあの時、私は誠さんから指輪をもらった。

両親からの了解は得ていなかったが、誠さんの気持ちとしての婚約指輪。

実は今も、左手の薬指にはめている。

私は指輪をそつと撫でながら、何となく胸がじんつとするのを感じていた。

ああ、本当にその日が来たんだ。

「入りましょうか」

「はい」

中はある時と何も変わっていないくて、間接照明の穏やかな明かりと、心地よいジャズが流れていた。

何となく気持ちがあの時へ戻っていく。

「いらっしゃいませ」

お店のご夫婦も変わっていない。

奥様と思われる綺麗な女性が、私達を席に案内してくれた。
あの時と同じ机だ。

私は嬉しくて、思わず机を撫でてしまった。

「お久しぶりですね」

奥様が笑顔で、そう言ってくれた。

「私達のこと、憶えているのですか？」

私は驚いて、思わず聞いてしまった。

「とても印象的だったので。あの時の指輪ですか？」

私の薬指の指輪をちらっと見て、聞いてきた。

「はい」

「ふふ、相変わらず、仲が良さそうですね」

そう言われて、私も誠さんも顔を赤くしてしまった。

「どうぞ、ごゆっくりして行って下さいね」

奥様は優しい笑顔で、そう声をかけてくれて厨房へ戻って行ってしまった。

私は誠さんと顔を見合わせて、互いに嬉しくて笑みがこぼれてしまった。

「やっぱりいい店ですね」

「はい。今日も楽しみです」

私達はたわいもない話を交わしながら、おいしい料理を楽しんだ。この料理、家で作れないかな、とか。パスタのレシピをもっと増やしてみようか、とか話しながら。

あたりは今日もお客さんで一杯になって、どのテーブルも楽しそうな会話が弾んでいた。

心地良い気温と、柔らかな光。話し声と静かなジャズの音。

私はお酒を飲んでもいないのに、何となく雲に乗ったような、ふわふわと温かい空気に包まれて心地良かった。

プロボーズのことを少し忘れていたかも知れない。

私の手が、誠さんの手で包まれる。

私の意識が急に浮上してきて、緊張感が戻ってきた。

「まどかさん……」

「はいっ！」

思わず、大きな声で返事をしてしまう。

私はあわてて口に手をあて、恥ずかしくて顔を伏せてしまった。

包まれた手が、ぎゅっと握られたような気がする。

私の心臓が急に大きな鼓動を打ち始めた。

あんまり鼓動が強くて大きくて、胸が痛くなるほどだった。

私はそつと顔を上げると、緊張した顔の誠さんと目が合った。

目が、離せない。

わずかな沈黙の後、誠さんが言ってくれた。

「僕と、結婚して下さい」

うつ……わー……!!

何というか、頭の中で叫んでしまつて、視界がチカチカする。解っていたことなのに、身体が固まるかと思うほど緊張した。

あっあっ……えっと……はっ、はいつて言わないと……。

私は口をパクパクして、出せない言葉を何とか言おうとした。

でも、出てきたのは……涙ばかりで……。

なっ、なんで涙!! へっ、返事しないと………と思ったのに、私は涙が止まらなくて、恥ずかしくて手で顔を隠した。

手の平に涙が伝っていく。

胸の中がいっぱい。

「はい……」

私はどうにか小さくつぶやいた。

有り難う、誠さん。

私をもらってくれて。

頭を誠さんが優しく撫でてくれたり、周り人達が拍手や祝福の言葉をかけてくれたり、店の人がお祝いをしてくれたりしたけれど、

私はその後のことをあまり憶えていなかった。

私はきつとこの日のことを忘れない。

年をとっても、この時のことを思い出して誠さんと話をするのだ
ろう。

恥ずかしそうにしながら。

店を出ると、綺麗な月が光っていた。

私は夜空を見上げ、澄んだ心で誓った。

誠さんと一生をともに歩く、と。

両親への報告

スーツを着た誠さん。

その向かいには、緊張した面持ちの父。

……何とも言えない緊張感です。

数日前、私は母に「今度の日曜日。誠さんと挨拶に行きます」と話した。

わずかな沈黙の後、

「ふふふ……解ったわ。待ってる」

と、母は不気味な笑い声を残して電話を切った。

母、いつもとキャラが違います。

ただ、それですべてが通じたようで、いまのこの状況となっていて。

額からつつすらと汗が見える誠さん。

向かい合い、腕を組む父。

横で落ち着かない私。

一人はしゃいで料理を作る母。

なんとも言えない緊張感と沈黙に、助け舟を出したい気持ちになるけれど、ここはひとつ誠さんに頑張つて欲しい。

誠さんを見ると、喉元まで言葉が出かかっているのがわかる。でも、父の硬い表情を見て、言葉を出せずにいるようで。

同棲を許可してくれた時点で、父も決して誠さんに反対ではない。でも、娘を嫁に出すには早すぎる、という思いもあるはず。

駄目、とは言わなくとも、素直に祝福してくれるかどうか。

……ああ、何か誠さんの緊張が私にまで伝わってきた。

思わず握った手に汗をかいてしまった。

それなのに、なんで母はあんなに陽気に鼻歌を歌っていられるのかな……。

「まっ……」

おっ?!

「まどかさんとっ！！」

わっ、誠さんがしゃべった！

よし、行け！ 誠さん！

「まどかさんとっ、結婚させ……させて下さい」

ちよつと噛んだ！

でも言った。言い切った。

誠さんが深く頭を下げると、額の汗がぽとりと机に落ちた。

その一生懸命さに、私はちよつとだけ胸がきゅっとなる。

有り難うね、誠さん。

父は黙っていた。

なかなか一言をかけてくれなかった。

言おうとはしている。

でも、言いづらそう。

ぱーんっ――！

場違いな音に、何かと見てみたら、母が父の後頭部をはたいていた。

父も思わず振り返り母を見上げると、母は目だけで「早く返事するの」と脅していた。

やっぱり母、いつもとキャラ違います。

父はため息をつきながら、渋々といった様子でつぶやいた。

「解った……娘をよろしく頼む」

「はい！」

おおっ！ クリアしました。

母の一撃のせいで何となく感動が薄れてしまったけれど、でも1つ目の挨拶が済みました。

1つ目……というのは、実はすぐそこに真穂さんも座っているわけ。

「どうせなら一度で、全てをすませましょう」

と母は、それぞれの両親への報告だけでなく、家族の顔見せまでやってしまう、という荒業に出ていた。

と言うことは、次は私の番、ということかしら。

えーっと、この場合は何ていうの？

息子さんを私に下さい……ではないよね。

嫁がせて下さい。でもないか。

あれ？

私が悩んでいる横で、誠さんが一言。

「母さんは、もちろんいいよね」

「当たり前じゃない。大歓迎よ」

と話をあつさり進めてしまった。

ここに緊張感はなかったのね。

「よつ、よろしく願います」

私は何はともあれ、真穂さんに頭を下げる。

「こちらこそ。ようやくまどちゃんが本当の娘になってくれて、私も嬉しい！」

真穂さんが私の手を取って、喜んでくれた。

「私も嬉しいです。有り難うございます」

「まさか自転車の縁からここまで来るなんてね」

そうだ、真穂さんの自転車のチェーンが外れたのが、そもそものきっかけだ。

私も忘れかけていたけれど、あれが無かったら出会いはなかったのかも知れない。

本当に人の出会いって運だったり、縁だったり、不思議だ。

誠さんと本当に結婚することになるなんて、最初は思いもしなかった。

時を重ね、言葉を重ね、経験を重ねる中で、この人と一生いてもいいな、という思いが芽生えた時、結婚という言葉を意識した。

それはあの、クリスマスイヴに指輪をもらった時かも知れない。私はあの時、初めて結婚というものを意識して、そして嬉しいと思った。

それからだいぶ時が経ってしまったが、結局誠さんも私もその思いが変わることはなかった。

だから安心して、一步を踏み出すことができる。

「おめでたいけれど、これからが大変よ。結婚式の準備、手伝うけどいろいろと決めなくちゃね」

大変と言いながら、母はどこか楽しそうだった。

「まだ学生だから会社の上司や来賓を呼ばなくてもいいし、二人らしくやりなさい」

真穂さんが優しく助言してくれた。

「学生らしく慎ましく、いままでお世話になった人達に感謝の気持ち

ちを伝えなさい」

父が静かに考えを伝えてくれると、誠さんが

「はい」

と返事をした。

誠さんも父親が出来てどこか嬉しそうなのは、きっと私の気のせいではないはず。

「まどかちゃんのウェディングドレス姿、楽しみ。そうだ、試着は一緒に行かせて！」

真穂さんが嬉しそうに聞いてくるので、私は

「もちろんです。お願いします」

と返事をした。

ウェディングドレスか……。

ちよっとワクワクする。

昔はズボンばかりだったのに、私も女の子だな……。

誠さんはタキシード？

似合いそうだけど、もしかしてウェディングドレスの方が似あったりして。

あっ、いけない。

想像したら笑えてきてしまった。

私の笑顔を、たぶん勘違いしている誠さんが手を握ってくれた。
互いに視線を合わせると、ほっとした表情の誠さんにも笑顔が戻
っている。

そうだね。

大変かもしれないけれど、いろいろ楽しみだ。

これもまた勉強しながら、良い結婚式と一緒に楽しみましょう！

ねっ、誠さん。

結婚式の準備

結婚式は大変だと聞いていたが、意外にそうでもなかった。

というのも、私達は「ないないづくし」と言えいいのか。

まず、招待したい人の数が少ない。

共通の友達が多い、仕事をしていないので気を使って呼ばなくちゃいけない人もいない、それぞれの親族もあまり多くない。

結局、全員入れても50名を切ってしまいそうだ。

無理に増やそうと思うこともないし、それでいいのだと思う。

ちなみに誠さんのお父様は呼ばないことになった。

無理をさせて、何か迷惑がかかっていもいけないので、と言う事
のようだ。

その代わり、二人で事前報告に行くことにした。

私も初めてお会いするので、緊張するけれど、どこか楽しみでも
ある。

誠さんと似ているのかな？

将来の誠さんとか？

ちよつと想像して、ぐふぐふと萌えている。

そして、新婚旅行がない。

日程的にも長期の休みが取りにくいし、親のお金で海外旅行に行

くのも、私達は嫌だった。

翌日に一日だけ京都を散策しよう、と言う話で落ち着いた。

そして、もう一つ。

新居を考えなくていい。

結婚しても、そのまま今の部屋に戻るだけだから。

籍を入れるのは、結婚式の少し前に二人で行くことになった。
修正があるといけないので、ちゃんと役所が開いている時間にした。

結婚指輪について。

実は二人とも、1つだけバイトをしている。

バイトといっても家庭教師なのだが、まあ私達らしいと言つか、得意分野と言うか。

週に一回だけで、私は女の子の、誠さんは男の子の。

しかも、同じ曜日のほとんど同じ時間をお願いしている。

そうやってほそぼそと貯めたお金で、結婚指輪を買うことにした。
ずっとはめておくものだからシンプルなものがいい、とかなり細
めでほとんど装飾のないものを選んだ。

裏に互いの名前と、結婚式の日取りだけ刻印していただいた。

ある意味、月給3か月分どころではないな。
大事にしないと。

結婚式そのものもシンプルだ。
父から言われた「感謝の気持ちを伝える」ために、私達は料理が

おいしい所を考えた。

いわゆる結婚式場ではなく、私達も食べてみて「美味しい」と感じたレストランを貸切ることにした。

そうすると、キャンドルサービスもお色直しもないけれど、代わりにそれぞれのテーブルに行って、話をする時間を十分にとることができた。

来ていただいた何名かにお話をいただいたり、父や誠さんだけでなく、私もみなさんに向けて話をすることにした。

エンターテイメントは無いけれど、アットホームな雰囲気と、話を大事にしてみたのだ。

さて、みなさんに喜んでいただけるだろうか。

そして、衣装合わせ。

私は産まれて初めて、ウェディングドレスというものに袖を通した。

何だろう、この感覚は。

「綺麗！」

一緒に来てくれた真穂さんが、本当に嬉しそうに言ってくれた。恥ずかしながら、鏡に写る自分の姿を見て、私もそう思ってしまった。

衣装のためだと思っけれど、何となくいつもよりは自分もちよっと可愛く見える。

ただ、いわゆるAラインというスタイルなんだけど、これだと肩とか首元とか露出が多くて、その……胸が……。

「まどかちゃんは胸が大きいから、すっごい似合ってる」

エロっぽくないですか？ 大丈夫ですか？

幸か不幸か、胸は高校時代と比べて更に成長してしまった。やっぱり高校ほどは運動していないのが原因だろうか。

まさか、よく揉んでもらっているからではないよね。

結婚式までに少しダイエットしなくちゃ。

マーメイドとか、プリンセスとか、いくつかのスタイルを試したが、結局シンプルなものに落ち着いた。

何となく、それが自分に一番合っているような気がした。

髪型や髪飾り、ブーケなど、決めることは多い。

全体的にグリーンとオフホワイトが基本の色合いとなる。

真穂さんが私以上にウキウキしてくれていて、私は思わず言ってしまった。

「真穂さんが楽しそうで、私も嬉しいです」

それに対して、真穂さんがその理由をこう説明してくれた。

「私がほら、結婚式を開いていないから」

あっ……そうだった。

「ごめんなさい」

私は思わず頭を下げた。謝る。

でも、真穂さんはまったく気にした様子ではなくて、笑って私の手を取る。

「この歳になつて、今更ウェディングドレスを着たいとは思わないわ。似合わないし。でもね、まどちゃんが着てくれると、何となく自分のことみたいに嬉しい」

「真穂さん……」

「まどかちゃんほんとうに可愛いし、綺麗だし、スタイルがいいし。ウェディングドレスを着ている姿を見て、なんかもう感動しちゃって」

私は何となく胸が苦しくなってしまった。

「有り難うございます」

真穂さんが取っていた私の手をぎゅっと握ってくれた。

「私の方こそ。息子を選んでくれて、私の娘になってくれて、こんな綺麗なウェディングドレス姿を見せてくれて、本当に有り難う」

「……………」

「あなたでよかった。安心してあの子を任せられる。これから私の代わりをお願いね」

夫もいなくて、息子と二人ぐらしの生活を19年。

多分、いろんな苦しいこともあったと思う。

それでもきつと誠さんには弱音を吐かずに、乗り越えてきた、守ってきたのだろう。

誠さんを心の支えとしながら。

私は浅はかだった。

同棲を勧めてくれた時、そんな寂しさや決意を抱えていたなんて思いもしなかった。

今、一人の生活でどれだけ寂しいかなんて、想像もしていなかった。

私が一人で泣いた時間を、真穂さんはどれだけ重ねてきたのだろう。

私は、泣けてしまった。

何だか、泣けて泣けて仕方がなかった。

気付いたら真穂さんまで泣き出していて、衣装合わせのお店の中だというのに、私達は抱き合って泣き続けてしまった。

店員さんは少し困ったような顔をしていたけれど、黙って席を外してくれた。

「まどかさん？ 母さん？」

別の部屋で衣装合わせをしていた誠さんがやって来て、何が起きているのか理解できずにおろおろしている。

でも、いいの。

今は、今だけは、誠さんより真穂さんが大事なの。

大事な、大事な、私の新しいお母さん。

一人で寂しい思いを抱え込みたいで欲しい。

家族が増えたのだから、寂しさも悲しさもみんな抱えれば重くないから。

きつと。

真穂さんが優しく頭を撫でてくれるから、私も思わず真穂さんの背中をさすってしまった。

「これから……宜しく願います」

「私の方こそ。宜しくね」

私達はそつと離れて、視線を合わせた。

何となくお互いに恥ずかしくて、笑い顔になってしまう。

うん、泣き顔より笑顔のほうがいい。

「えーと……」

「ああ、まだいたの？ ああ、いいんじゃない、それで」

「……それだけ？」

「男の衣装なんて、別に面白くとも何ともない。着ていてればいいのよ。花嫁をひき立てれば十分」

あまりの対応の差に、私は隠れて「くくくつ」と笑ってしまった。

実の息子の晴れ姿ですよ、真穂さん。

「誠さん、格好いいですよ」

誠さんもオーソドックスなタキシードで、よく似合っている。

高校の時よりも体格がしっかりしてきていて、男らしいと言うか。

「まどかさんも似あっています」

「有り難うございます」

「こんな綺麗なお嫁さんもらって、誠も幸せね」

真穂さんの言葉に、誠さんも私を眺めながらうなずいている。

店員さんもお世辞だらうけど、一緒になってうなずいてくれて、私のほうが恥ずかしくなってきてしまった。

さあ、結婚式の用意はこれでほとんど終わった。

まだ招待状の発送とか席順とか、細かいところはまだまだあるの
だらうけど、ウェディングドレスを着てみて、心の準備が整ってし
まった。

誠さんと結婚する。

それに真穂さんと家族になる。

それがとても自然なことのように、心に落ちたのだ。

当日はどうなるのだろう。

私はだんだんとその日を楽しみにし始めていた。

悠太の彼女

結婚式の前に、2つほど大事な出来事があった。

ひとつは悠太から電話があったこと。

東京へ引っ越してしまってからメールも電話もなくて、少し心配していた。

年賀状で住所や近況は互いに知らせていたが、それだけが唯一のつながりだった。

だから携帯が鳴って、そこに「悠太」の文字を見た時は、ちょっとばかりドキドキした。

「はい、まどかです」

「まどか、久しぶり」

「悠太。久しぶり、元気にしていた？」

「元気だよ、大丈夫」

思っていたよりも普通にやり取りができて、私はほっとした。

「いつか来るかな、と思っていたけれど、とうとう招待状が届いてしまった」

そう、悠太にも結婚式の招待状を送ったのだ。

やっぱり悠太には出て欲しい。

彼としては嫌かもしれない、断わられても仕方がない、と心配しつつ。

「来てくれる？」

「もちろん、喜んで」

悠太の言葉に私は心からほっとした。

「良かった、有り難う」

「俺の方こそ、呼んでくれて有り難う」

「うん、それでもう一つお願いがあるんだけど」

「招待状に入っていた、一言いただきたい、っていうやつ？」

そう。私は出てくれるかだけでも心配だったのに、友人としての一言をお願いしてしまった。

「そう。悠太に一言欲しくて」

「……まだかにそう言われると、断れないな」

「ごめん」

「がらじゃないけど、やるよ」

「有り難う。楽しみにしてる」

「うん。……それで代わりにお願いなんだけど」

「えっ、何？」

悠太からお願い？

何だろうと首を傾げると、電話口の向こうで少しためらいながら悠太が話してくれた。

「もう一人分、席を用意して欲しい」

「もう一人？」

「うん」

悠太に兄弟はいない。
もしかして……。

「彼女を、連れていきたいんだ」

私は驚きで言葉が出なかった。

悠太に彼女！

私の心の奥から、ゆっくりと嬉しい気持ちさがこみ上げてきた。

本当に、良かった。

「彼女、できたんだ」

「うん」

「ようやくだね」

悠太がくすつと笑う。

「誰かさんのせいだね。初めて女の子と付き合うことになったよ」

「そうだ、初めてだ。悠太モテるのに」

「だから、誰かさんのせいだね」

「相変わらず責めるのね」

「まどかのせいじゃなくても、これぐらいは言わせてくれ」

二人で笑った。

「どんな人？」

「どんな……か。聞かれると難しいな。変な奴と言うか、おかしな

奴と言うか……まあ一緒にいて飽きないよ」

「そう。何か想像つかないな」

「確かに、まどかとはだいぶ違うからな」

「私と違ってお淑やかとか？」

「いや、元気だね」

「髪が長いとか」

「短いね」

「気が長いとか？」

「短気」

「……私と似てない？」

「そうかも知れない」

悠太はそう言って笑った。

「言われてみると、俺はそういうのが好みなのかも知れない」

「あまり褒められた好みじゃないね」

「まっただ」

悠太のため息をつかんばかりの一言に、私は大笑いをしてしまった。

横で誠さんが勉強しているけれど、そんな私のことを笑顔を浮かべて見ている。

やり取りの様子で、だいたい理解できているのかな？

後で説明しますね。

「解った。一人分、席を増やしておくから」

「有り難う。当日、紹介する」

「うん、楽しみにしてる」

「ああ、それじゃあ。夜分にごめん。誠にもよろしく」

「有り難う。また電話してね」

「有り難う。まどかもね」

私達はそう言って、電話を切った。

「悠太さんから？」

誠さんが聞いてきて、私はうなずいた。

「はい。彼女を結婚式に連れていきたいって言っていました」

「彼女！」

「はい」

誠さんもやつぱりびっくりしている。

まあ、今までの悠太を知っている人は誰でもびっくりするか。

「それは、良かった。どんな子かな」

「私に似ているとか似ていないとか」

「……良く解りませんね」

「そうですね。当日の楽しみということだ」

「でもやつぱり、どこかまどかさんに似ているような気がします」

誠さんが真剣な顔でそう言ってきた。

「そうですか？」

「きつとそうです」

男同士だけに解る何かがあるのかな。
誠さん、妙に自信がありそうだ。

私は自分がそんなに魅力的だとは思わないけれど、でも、有り難いことです。

私達は結婚式の時に、悠太の挨拶と彼女に会えることを、今から楽しみにしていた。

お父様

そして、もう一つは誠さんのお父様にお会いすること。

結婚式には招待出来なかったけれど、事前にご挨拶をすることになった。

誠さんが電話すると、とても喜んでくれたようで、病院にご挨拶に伺うだけの予定が、夕食を一緒することになってしまった。

まあ、きっと理由をつけて、息子にまたゆっくり会いたいのだと思う。

私もご相伴にあずかりましょう。

お店は、誠さんとお父さまが初めて一緒に食事をしたところ。誠さんに連れられたそのお店は、私は入ったことがないような料亭だった。

あまり目立たない入口の前に、いくつもの高級そうな車が、運転手付きで待っている。

本当にあるのね、こういう店。

私達は中に入り、和装の女性に案内されていく。
あまり広くない板間の廊下から、綺麗に整えられた日本庭園が見えた。

お客さんがたくさんいる筈なのに、誰とも会わないし、ほとんど話し声も聞こえない。

うん、貴重な体験だ。

ちょっとだけ緊張するな。

女性が奥の部屋の扉を開けて、中に案内してくれた。

それほど広くはないが、ちゃんと畳で床の間もある、落ち着いた雰囲気の部屋だった。

まだ、お父様は到着していないらしい。

先に席に着いたことにほっとしながら、私達は下座に誠さんと並んで座った。

「緊張します」

私は思わず、そう呟いた。

誠さんのお父様ってどんな人だろう。

病院の院長で、こんなお店に招待する人だから、さすがに真穂さんのようなはいかない。

格好やお化粧はおかしくないか、今さらながら気になってきた。

「大丈夫ですよ。意外に気さくな人です」

「誠さんにとっては実のお父様だから……」

「これからは、まどかさんにとっても父親でしょう」

「そうですけど……」

そんなやり取りをしていたら廊下で物音がして、扉が開いた。そこに誠さんそっくりの、スーツ姿の男性が入ってきて、すぐに

それがお父様だと解る。

私は思わず姿勢を正してしまった。

やっぱり緊張します。

「申し訳ない、お待たせした」

お父様は軽く頭を下げると、そのまま向かい側の席に座ってくれた。

そして、あらためて互いに顔を合わせた。

うん、間違いなく親子だ。

似てる……。

何というか顔のラインと言っか、髪質と言っか。

誠さんも将来、こんな感じになるのかな……。

威厳があつて、落ち着いていて、ちよつと格好いい。

……期待しちゃお。

「まどかさん……だったね、初めまして。惣島正平です」

「こちらこそ、よろしく願ひします。如月まどかです」

まだ結婚していないから、如月でいいよね。

私はちよつと後ろに下がって、ちゃんと三指について頭を下げた。

「ああ、そんなに畏まらなくていい。気を楽にして。そうしてもらったほうが私も嬉しい」

「有り難うございます」

顔を上げてお父様の表情をうかがうと確かに穏やかな笑顔をしていて、私もいくらか緊張がとれていくのを感じていた。

「挨拶はこれぐらいにして、食べよう。二人ともお腹が空いているだろう」

そう言つて、お父様はお店の方に料理を出してくれるように頼んだ。

すでに用意されていたのか、幾つかの料理と飲物がすみやかに机の上に並べられたかと思うと、すっと店の人が部屋を出て静かに扉を閉める。

部屋はまた静かな空間に戻った。

さすが料亭。

こんな所で大事な話し合いって行われるのね、きつと。

「いただきます」

私達は手を合わせて、素直に食事をいただくこととした。

ちよつと緊張していて味は解りづらいけど、うん、美味しいと思う。

「二人の馴れ初めを聞いていいかな」

お父様は食事にはまだ手をつけておらず、ビールを美味しそうに飲みながら聞いてきた。

馴れ初め……ですか。

あらためて言われると、何となく「新婚さんいらっしやい！」に出ているような錯覚を。

そんなことを考えている間に、誠さんが代わりに話してくれた。

「まどかさんが先に医師になる夢を抱いていました。僕はその夢を応援したくて、勉強を教え始めたのがきっかけになります」

「そうか、二人とも私の後輩だったね」

「はい」

そうか、お父様も同じ大学の同じ学部ですね。

そう言えば。

ちよつと恐れ多いけれど。

「それから？ 付き合い始めのきっかけは」

意外に聞きますね。お父様。

「えっ、えっと……その僕が公園で告白して……」

「公園で告白か……高校生らしいな」

何となく二人で顔が赤くなってしまった。

あの時は感動したけれど、思い出すと恥ずかしいものですね。

「そうか、じゃあ二人とも若いけれど、付き合いはそれなりに長いのか」

「はい。といつても4年ですが」

そうか、もう4年と言うか、まだ4年と言うか。

色々あつたけれど。

「二人とも医学部に入るだけのしつかり者で、4年も思いが変わらないのであれば、まあ先ず大丈夫だろう。ご両親も、それで安心して許可を出したんじゃないかな」

「はい、むしろ結婚を進めてくれたと言うか」

「はは、まあ医者になってからだ、タイミングが難しいからな」

やっぱりそうなんですね。

忙しいんだろうな……。

「私も誠くんことは信頼している。彼が選んだ人ならば心配ないだろう。私も二人を祝福したい」

「有り難うございます」

誠さんと二人で頭を下げた。

良かった……認めてもらえて。

と言つても、誠さんの信頼のお陰だけれど。

「結婚式に出られない代わりに、これを受け取っ欲しい」

お父様はそう言つて、傍らから何かを取り出した。

机の上に置かれたのはご祝儀袋。

しかも、けっこう分厚い。

こつ、これは……そうとう入ってますね。

何となく私は「お主も悪よのう」という越後屋と悪代官のやり取りを思い出してしまった。

多分いま私一人、緊張感が解けています。

「受け取れません」

誠さんが男らしく、断つてくれた。

しかし、お父様は頭を横に振って言葉を続けた。

「これは単なるご祝儀ではない。父親であれば本来、結婚式の費用を出したり、車や新居といった費用の一部や全部を助けるのは普通だと思う。しかし、私にはこれからそれができない。それを考えたら、この金額は少なすぎるぐらいなんだ。だから受け取って欲しい。これは私の我侭なんだ」

なるほど、私もそれは理解できる。

これから何もしてあげられないお父様の、最初で最後のできること、なのかも知れない。

金額が凄そうだけど、ここは受け取っておくべきなのだと思う。

誠さんも悩んでいるようで、ちらつと私の方を見た。

私は黙ってうなずいた。

それで誠さんも決心がついたようで、お父様に頭を下げた。

「解りました。受け取らせていただきます」

誠さんの言葉を聞いて、お父様はほっとしたような表情を浮かべている。

「有り難う。それと、ご祝儀というのは金額が多い場合はお返しを

しなくてはいけない、と言われているが、くれぐれもこのお金に対しては、そういったことは考えないように。それでは私がお金を渡した意味がなくなるからね」

私達は軽く頭を下げた。

細かいところまで気を使っていただけで、申し訳ない。

馴れ初め

その後しばらくは料理を食べたり、他愛もない話が続いた。緊張感もだいぶ和らぎ、穏やかな空気になっていたと思う。

お父様から「まどかさんも、なにか聞いておきたいことはあるかな」という質問に、私は思わず聞いてしまった。

「あの、真穂お母様との馴れ初めは……」

私の質問に、お父様の手が止まる。

あつ、空気が固まりましたね。

私、またやってしまったのでしょうか……。

背中に嫌な汗が流れそうになっていたのですが、お父様はため息をつく、誠さんに向かって話し始めた。

「確かに君達には聞く権利はあると思う。誰にも話したことはないのだけれど。その……誠くんは聞きたいかね」

お父様の問いに、誠さんはいくらか戸惑っているようだった。

今まで意識していなかったけれど、でも聞いてみたい、と思っているような。

「……はい。できれば」

誠さんは悩んだ結果、そう返事をした。

「そうか」

お父様は持っていた盃を傾けて、日本酒を飲み干した。
それでも、まだどう話したら良いか、ためらっているような沈黙が続く。

「もう20年以上前になるのか……」

そう言って、お父様は静かに語りだしてくれた。

「私は医師として10年以上たっていて、あの時は何でもできるような気持ちになって、仕事が楽しくて仕方が無い頃だった。毎日のように遅くまで診療をしたり、勉強をしたり、スタッフと飲んだりした。すでに結婚していたが、家にはほとんど寝に帰るような毎日だったんだ」

お父様の昔の様子が、私には何となく想像できた。

おそらくとても優秀だったのだと思う。

仕事が楽しくて仕方がなくて、その反面、家庭は疎かになってしまっ

た。家のことは奥様に任せたと考えていたのかも知れない。

「真穂さんとは同じ職場で働いていた。彼女も勉強家で、よく遅く

まで患者さんのために残って様子を見たり、どうしたらよいかを話しあったりした。向かい合う姿勢が誰に対してもとても誠実で、彼女のほうが年下だったが、私は尊敬していた」

わずかな沈黙。

私達は話の続きを待った。

「私はある日、彼女が私に好意を持っていることに気づいてしまった。ほんの些細な行動の端々で、あるいは自分の思い込みだったかも知れないが、私はそう感じた。でも、彼女は不倫を恐れ、それ以上の行動を起こす気がなかったのも理解していた。その関係はずっと続くと思っていた。」

……私のせいなんだ。ある晩、私達はいつものように仕事が遅くなり、二人で夜道を一緒に歩いていた。その時、彼女が異動になることを打ち明けてきた。同じ病院内だが科が変われば会える機会は激減する。そのことを聞かされて、私は寂しいと感じてしまった。離れたくない、と気づいてしまった。言うてはいけないのに、私はついその気持ちを伝えてしまった。

彼女がそう言われて、立ち止まった。うつむいていたので、どうしたのかと私はうるたえたが、彼女が顔を上げると彼女の目に涙が滲んでいた。それを見て、私は自分を抑えることが出来なかった。

……キスをしてしまったんだ」

お父様……駄目です。

意思の強い方と思ったのに。

真穂さんが魅力的だったのは想像できるけれど、我慢しなくちゃ……。

と言っても、そこで我慢したら誠さんと出会えなかったわけで。私としては複雑な気持ちだった。

ただ、すこしだけ不安にもなってしまった。

もしかしたら、誠さんもいつかそんな日がくるのかも知れない。
お父様も早めの結婚で、仕事が忙しくなって、能力が高くて、魅力的で。

条件としても合うし、お父様の血を引いているのだから、無いとは言いい切れない。

もし、万が一、そんなことがあったとしたら、私はそれをどう受け止めるのだろうか。

辛いだろうな。

変わらずに愛することが出来るのか、今の私には解らない。

そんな日が来ないことを、ただ祈るしかない。

「互いにいけないと思いつつ、2ヶ月、関係が続いてしまった」

2ヶ月。

長いような、短いような。

「そして彼女が私の元から消えた」

お父様は持っていた盃に力を入れた。

何かを我慢しているような表情。

その時のことを思い出しているのかも知れない。

「彼女は退職して、隣町の病院に勤務をしていた。そのことはすぐに解ったが、こんな関係が続いていいわけではないことは理解していた。だから彼女が私の元から姿を消したのを、私が追ってはいけ

ない、と考えたんだ。……まさか妊娠しているとは考えもしなかった」

医師なのに妊娠の可能性に気づかないこともあるの？、とか、離婚をして真穂さんを追いかけるという選択肢はなかったの？、とか、いろいろ考えたけれど、さすがにそこまでは質問出来なかった。

お父様は深く、頭を下げた。

「あらためて、申し訳ない。謝つてすむ問題ではないが、それしか言葉がない」

誠さんがようやく口を開いた。

「その件については前回もお話したとおり、私は恨みを持っていません。ですから謝罪は必要ありません。ただ念のため、1つだけ聞いていいですか？」

「なんでも聞いてくれ」

「他にも、こうした女性との関係はあったのですか？」

思っていた以上にストレートな質問に、私もお父様も息を飲んだ。でも確かに、誠さんにとっては大切な質問かもしれない。

「ない、あるわけがない」

お父様は断言した。

「ならばいいです」

誠さんの言葉はむしろ静かだった。
あまり動揺した様子も見られない。

と言うよりも、何というか、関係ないと思っただけと言うか。

そう、誠さんは私の父に対しての方がよっぽど、親愛の情を示してくれている。

本当の父親は、私の父であるかのように。

血のつながりより、誠さんは心のつながりを選んでくれたのだろ
うか。

私の父は浮気をしたことがないはず。今でも、夫婦仲はとても円
満だ。

そんな家庭に、誠さんが憧れてくれているのであれば、私として
も嬉しい。

何とも気まずい空気が漂う。

この空気を作ってしまったのが自分なので、話題を変えたくなっ
てしまった。

「あの、お父様にはお子様がいらっしゃいますか？」

「あつ、ああ。……娘が二人いる。どちらも嫁いってしまったし、医
者とは関係がない」

「そうなんですか」

「だから、もし誠くんはその気があれば、いつかここの院長を引き

継いでもらいたい、と思っている」

おおっっ！

それはまた、おっきなプレゼントですね！

確かかなり大きな病院と聞いていますが。

でも、誠さんの返事は相変わらず静かだった。

「医師として尊敬しています。……ただ私は研究者でありたいと思っています」

誠さん……ちょっと格好良かったです。

父親として、ではなくて、医師として尊敬をしています、と伝え。そして自分は経営者ではなく、研究者でありたい、と柔らかくお断りをして。

いつのまに、こんな技を覚えたんですか。

もっ……これ以上、好きにさせないで下さい……なんてね。

「そうか……残念だが、そう言うかと思っていた。ただ、私も気持ちを伝えたかった」

「はい。有り難うございます」

「いつでも力になるから、遠慮無く言ってくれ」

誠さんは軽く一礼した。

「まどかさんも。同じように遠慮せず」

「はい、有り難うございます」

私も軽く一礼した。

何とか雰囲気を持ちなおして、私達のお父様への報告は終わった。

最後はまずまず和やかに終わって、私達はタクシーに乗るお父さまを見送ってから、ゆっくりと夜道を歩いたり電車に乗ったりして帰った。

良さそうな人だったけれど……………疲れた……………。

結婚式前夜

とうとう結婚式の前日になった。

今夜ぐらいは互いに実家で過ごそうと話し合い、私達は簡単な身支度を整えて帰ることにした。

見慣れたはずの実家の玄関が何となくよそよそしく感じて、何かもう帰る家はここでは無くなったんだな、とちよつと悲しくなったりして。

「ただいま！」

なるべく今までのように明るく大きな声で中に入ると、やっぱりいつものように母が迎えてくれた。

「お帰りなさい」

こんなやり取りを、今までに何度繰り返してきたのだろう。今までは当たり前だったことが、何となく愛しくて。私はちよつとばかり切なくなってしまった。

母は笑顔で私の肩を叩いた。

「ご苦労様。もうすぐ夕食の用意ができるから、荷物を置いて手を洗ってらっしゃい」

「はい」

私は言われたとおり自分の部屋に荷物をおいて、洗面所で手を洗い、台所へ向かった。

「何か手伝えることある？」

「じゃあ、お箸とかお皿を出してもらえるかな」

「はい」

ふと見ると、父が居間のソファに座って新聞を読んでいた。

「お父さん、ただいま」

「おお、お帰り」

いま気づきました、とばかりに父親が顔を上げる。

でも、きっと玄関から入った時から解っているよね。

だって、もうすでに目が赤くて、ちよっと潤んでいるもん。

いつの間に、そんなに涙もろくなっちゃったの？

明日、大丈夫？

私はちよっただけ笑ってしまった。

「お父さん、用意が出来ましたよ」

「ああ、いま行く」

私達はいつもの席についた。

テーブルの上には、私の好物ばかりが盛りだくさん。
明日のために、今日は食べ過ぎないでおこうと思ったのに。
でも、母の気持ちは嬉しかった。

「いただきます」

私は感謝を込めて、いただくことにした。

あむ。

うん、やっぱり美味しい。

私の味の原点だな。

真似てみようと思って作ってみるけど、私のとはちょっと違う。

私は口の中に広がる幸せをかみしめて、ようやく帰ってきたことを実感していた。

「いよいよ明日ね。緊張してる？」

「ちよつとだけ。だって私も挨拶するから」

「そうね。私も楽しみにしているわ」

「大した話もできないけれど……お父さんも、よろしくね」

私は黙々と食べる父に声をかけた。

明日は結婚式で父、私、誠さんの順番で話をするのだ。

「解っている」

父は力強くそう返事してくれたけれど、母が、

「お父さん、大丈夫かしら。だって挨拶の文、読むたびに涙声になっちゃって、未だに最後まで読めたことがないのに」

と暴露してくれて、私は笑ってしまった。

父はひとり、苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「本番は大丈夫さ」

「本番が一番泣けるものよ」

最近の母は容赦がない。でも、温かさで二人の仲の良さを感じる。
うん、私もこんなふうになりたいかな。

私は背筋を伸ばし、このタイミングで気持ちを伝えることにした。

「お父さん、お母さん」

「うん」

「なに？」

「今まで有り難うございました。私、二人の子供として産まれて、
幸せでした」

私は箸を置いて、頭を下げる。

しばらく頭を下げていたら、あたりに沈黙が広がってしまい、私
は思わずそろりと顔を上げた。

そこには、滂沱の涙を流す父と、温かい微笑みで涙を滲ませる母
の顔があつて。

……って、父、泣きすぎです。

はっ、いけない。

私までもらい泣きしそうになってしまった。

父の涙を見て、あまりに凄くて笑いそうになったのに、思わず涙が出そうになるなんて、不意打ち過ぎ。

ここはあえて我慢だ。

「長かったような、あっという間だったような」

と母。

「あっという間だ。20年なんて、短かすぎる」

と父。

20年が短く感じる、ってどんな思いなんだろう。

私も家族を持ち、子供が産まれると解ることなのだろうか。

「まどか」

父がその大きな手で頭を撫でてくれた。

久しぶり感触に、私は一瞬だけ小さな子供に戻った。

「まどかのことを、私達は誰よりも愛している。困ったときにはいつでも戻って来なさい」

「はい」

「どこに出しても恥ずかしくない、自慢の娘だ。自分に自信を持つて」

「はい」

「明日は最高の花嫁姿を見せてくれ」

「……はい！」

私は照れくさかったけれど、元気に返事をした。

一柳家では、誠さんの言葉を借りれば「宴会」が開かれていたとのこと。

と言っても、真穂さんと誠さんの二人だけの宴会で、それも一方的に真穂さんが飲んで、誠さんにからんでいたらしい。

「ああもつ、本当にめでたい！」

「はいはい」

「あなたも二十歳になったんだから、一緒に飲みなさいよ！」

「ちよびちよびいただいています」

「そんな舐めるように飲まないで、ぐいっと！」

「新郎を二日酔いにして、どうしようというのですか」

「ああもつ、本当にめでたい」

そんなやりとりが何度も繰り返えられる。

「あんな可愛いお嫁さんを連れてきて、本当にでかした！」

「はいはい」

「結婚したら、早く孫を見せなさいよ！」

「はいはい」

誠さんは食事も終わり、明日の挨拶の文を読みながら、生返事をする。

それでも、真穂さんは終始嬉しそうにビールを飲んで何かを呟いていた。

「あー……妊娠がわかった時は不安だったけれど……産んで良かった……」

あまりに静かに呟いたので、誠さんは真穂さんの言葉を聞き逃すところだった。

誠さんが顔を上げると、いつのまにか真穂さんはうなだれる姿勢になってしまっていて、その表情を確認することはできない。

真穂さんはそのまま、独り言のように話し始めた。

「親には誰の子か話せなかったし、反対されて勘当されたし、友達も誰も賛成してくれなかったし、寂しかったな……でも、好きだったから、どうしても産みたかった……」

真穂さんは机に突っ伏すようにもたれかかる。

耳をそばだてなければいけないぐらい、声も小さくなってきた。

「産まれた時は、一人で泣いちゃって。でも、それからもう二度と泣かないって決めて頑張ってきたけれど……まどかちゃんと一緒に

……泣いちゃった……もう……いいよ……ね……」

「母さん……」

誠さんの声が届かないまま、真穂さんは寝息をたて始める。

誠さんは膝かけ用の軽い毛布を持ってきて、真穂さんの肩にかけると、その寝顔に一筋だけ涙がこぼれているのが見えた。

「……母さん、有り難う」

誠さんの言葉は寝ている真穂さんには届かなかったけれど、寝顔は何となく嬉しそうだった。

結婚式

とうとう。

その日がやってきてしまった。

結婚式当日は、寒いけれども雲ひとつない凜と澄んだ青空で。

私は真っ白なウェディングドレスを着て、扉の前でドキドキしながら立っていた。

隣にはやっぱり緊張した面持ちの誠さんがいて、私の姿を見ては嬉しそうに微笑んでいる。

「本当に、綺麗ですよ」

「有り難うございます。誠さんも格好いいですよ」

「頑張りましょうね」

「はい」

「さあ、それでは扉を開けますよ」

案内をしてくれる女性の声を聞いて、私は誠さんの腕に手を回す。

さて、それでは行きますか。

私は姿勢をただし、誠さんと共に歩き出した。

中に入ると、わあっという歓声と共に拍手がおきる。

私達は立ち止まって深く一礼してから、ゆっくりと歩き始めた。

懐かしい人、大切な人達が、みんな笑顔で迎えてくれる。

緊張するけれど、何となく胸がぐっとなる。

沢山はいないけれど、私達の大事な人達。

今日は本当に有り難うございます。

それほど広くはない会場だけれど、たくさんの窓から太陽の光が目一杯ふりそそいでいて、白いテーブルクロスに反射してあたりは眩しいほどに輝いていた。

何となく雲の上を歩いているみたい。

私達は一段高くなった席に着くと、もう一度一礼する。

拍手が一段と強くなり、やがてゆっくりと会場は静かになった。

さて、ここでひとつ緊張する儀式がある。

この会場は教会がないので、結婚式を簡略して、この場で指輪の交換だけおこなうつもりでいた。

司会進行の女性のアナウンスに従って、私達は互いに指輪を交換する。

相手の指にはめるというのは意外に難しいもので、ちょっと無理やり押し込むようにしてようやく入った。

ほっとするのもつかの間、次は誓いのキスとなる。

これは話し合いの段階でとばしましうとお願いしたが、プランナーの人が「これは絶対に必要です。頑張りましょうね」と笑顔で言われて、はずせなかったのだ。

誠さんがヴェールを上げてくれる。

うわっ、当たり前だけど、みんなが見てる。
ガン見です。

この中でキスするって、何かの拷問？

誠さんも心なしか、顔色が悪いです。

ええい、女は度胸！

ん？ 愛嬌だっけ……まあ、いいや。

さあ、誠さん。やってしましましょう！

私は目をつぶり、唇を軽く前に出す。

誠さんが少しだけ震える右手で、私の顎を支え、そっとキスをしてくれた。

「おおっ！」「わあっ！」

歓声とカメラのフラッシュが。

とっ、撮らないで！……と思っても、口には出せず。

誠さんもすぐに顔を離してくれたけれど、多分私達の顔は真っ赤だ。

二人でぎこちない笑顔を作って、芸能人のように写真を撮られまくった。

よし、何とか突破したぞ。

私達は席について、ようやく一息ついた。

これで、しばらくご歓談ください、だ。

とはいえ、いろんな人が挨拶に来てくれる。

プランナーの人が、「食事、食べられませんか」と言っていたけれど本当だ。

美味しそうな食事が並べられるけれど、口紅がとれともいけないし、ウェディングドレスを汚してもいけないし、暇もないし、食べられるわけがない。

とほほ……美味しそうなのに。

誠さんは隙を見て、ちょこつと食べている。

……羨ましい。

司会の方が私達の簡単な紹介をしてくれて、いらしてくださった方の挨拶が始まった。

トップバッターは、来賓の方がいないので、いきなり悠太だ。

まさか一番手だと思っていなかったようで、ちょっと焦っていたけれど、さすが悠太……マイクの前では落ち着いている。

そうだ、彼女どこ？ ああ見過ごした。

あとでちゃんと紹介してもらおう。

静かになった会場を確認して、悠太がゆっくりと話し始めた。

「ご両家のご家族、ご親族の皆様。この度は誠におめでとうございます。諸先輩方を差し置いて、はなはだ僭越ではございますが、新郎新婦の友人として、一言ご挨拶を述べさせていただきます」

悠太は一呼吸おいて、私達の方を見た。

「私は新婦であるまどかさんと産まれた時からの幼馴染です。互いの家がすぐ近くで、年も近く、私達は物心がつく前から一緒に遊んでいました。……そんなまどかさんとの間で、私の中で一番古く、そしてとても大切な思い出があります。それは私達が幼稚園での出来事です」

幼稚園のこと？

何かあったわけ……。

「まどかさんはとても明るくて活発で、元気な子でしたが、ちょっとずばらでおっちょこちよいでした」

一部で笑いが起きている。

これは、共感の笑い？

悔しい……。

「ある日、幼稚園で泣いているまどかさんを見ました。どうして泣いているのか聞いてみると、おばあちゃんからもらった大事なハンカチを、どこかに忘れてきたそうです。探したけれど見つからないと泣いていました」

ああ、あった……かな？

あんまり憶えていないや。

「先生にも事情を話して、3人で思い当たる所をいろいろ探ししました。教室にもない、トイレにもない、靴箱にもない。途方に暮れる中、私はふと思いだして砂場に行ってみました。お昼にまどかさんが遊んでいたのを思い出したからです。そして、そこに砂に埋れかけたハンカチを見つけて、私は喜んで拾って砂をはたいて、彼女に渡しました」

よく憶えているなあ……でも、なんでその話を今するのかな？

「まどかさんは、見つかってほっとしたのか、顔をぐしゃぐしゃにして泣きだしました。そして何度も何度も私に、『ありがとう』とつぶやいてくれました」

うわっ、恥ずかしい。

きっとひどい顔していたんだろうなあ。

そんなことを考えていた私に、悠太は一言こつぶやいてくれた。

「その時、私にとってまどかさんは、守るべき大事な『妹』になりました」

私ははっとした。

思わず悠太を見ると、悠太も私のことを見ていた。

そして、その目を見て、気づいてしまった。

悠太はその時、私に恋をしてしまったということに。

そんなに長い恋だったんだ……。

「髪も短くて、運動も得意で、妹と言うよりは弟のような存在でしたが」

また笑いが起きている。
くそー。

さっきのドキドキを返せ。

「でもその笑顔が曇らないように、私なりにずっと頑張って来ました。からかう奴から守ったり、友達が引越して悲しい時には慰めたり、寂しい思いをしないようにいつでも一緒に遊んだり」

ああ、そうだ。

私にとっては悠太がいるのは、当たり前のことです。
そうやって守ってくれることが、昔からあまりにも普通にやっていてくれたから、私も意識をしていなかったのかも知れない。

そう思ったら、悠太との思い出が走馬灯のように頭の中を駆け巡った。

笑っている顔、怒っている顔、我慢している顔。

あまりにも思い出が一杯すぎて、胸が苦しくなってしまった。

「それがいつしか、女の子らしくなって、一人前に恋をして、綺麗になって」

やばい。

この瞬間に寝めないで。

ほろっときちゃう。

「真つ白なウェディングドレスを着て……天使のようになって嫁いでいく……」

悠太の言葉が止まる。

ちよつと言葉が出ないみたい。

そんな様子を見たら、とうとう私のほぅが泣けてしまった。

ううう……ごめんなさい……それに、本当に有り難う。

「……誠くん、大事な妹をよろしくお願いします。ここまで大事に守ってきました。そのことを忘れず、これからの彼女をよろしくお願いします」

悠太の言葉に、誠さんがしっかりと視線をかわしてうなずいていく。

「あらためて、誠くん、まどかさん。ご結婚、おめでとうございます。二人の幸せを願い、お祝いの言葉とさせて頂きます。有り難うございました」

悠太が一礼すると、たくさんの拍手が送られた。

私はさっそく涙でぐじゅぐじゅだ。

化粧がくずれるう……でも挨拶、有り難う。

私は悠太にぺこりと頭を下げた。

悠太もにこっと笑って、自分の席へ戻って行った。

ケーキ入刀

ええい、一番手から泣かされるとは誤算だった……最後まで化粧が持つぬか心配になってきた。

化粧の崩れた花嫁なんて、そんな悲しい思い出は作りたくないのだけれど。

そんなことを考えていたら、次に曜子ちゃんが話をしてくれる番になった。

今日の曜子ちゃんはとても華やかな振袖を着ていて、何となく京都の修学旅行を思い出してしまった。

曜子ちゃんは軽い咳払いをして、話し始めてくれた。

「誠くん、まどかちゃん。ご結婚、おめでとうございます。悠太がきつと幼い時のまどかの話をしてくれると思っていたので、私は皆さんが知りたい『二人の馴れ初め』について話したいと思います」

ちよつと待ったあああ！！

それを話すかあああ。

私は出ていた涙もすっかり引っこみ、作り笑いをしながらも心はひきつっていた。

「二人の出会い、高校1年生の時に同じクラスになったことから始まりました。その時の誠さんは髪の毛も長くしてボサボサで、メガネも黒縁の瓶底メガネの、本当に目立たない存在でした。一方ま

どかちゃんは見ての通りの可愛い女の子で、入学当初から注目を集める存在でした」

……誠さんは、そんなにひどくなかったと思うけれど……一般的には、そういう評価だったのかな。

私のことは持ち上げすぎよ。

「そうならば当然、誠くんの方が先ずまどかちゃんを好きになったとお思いでしょうが、実はまどかちゃんが誠くんを一目惚れしてしまったのが、全ての始まりでした」

どよっ、と驚きの声上がる。

何ですか、この反応は。

「もちろん、まどかちゃんが医師になりたいという思いを抱いて、誠くんに勉強を教えてもらいたいとお願いしたのは事実ですが、なぜ誠くんじゃないと駄目だったのか……そのことに気付くのに、二人にとっては半年もの月日が必要でした」

ああ、そうだった……いま思い返すと、誰よりも曜子ちゃんが初めに気付いていたようだけど、私は自分の思いに気づくのに半年もかかってしまった。

でも、誠さんが私のことを好きになって、告白するまで思いがつのるのには、それだけの時間が必要だったのだと思う。

「その半年の間、ずいぶんとヤキモキさせてくれましたが、誠くんが振られる覚悟でのぞんだ告白があつて、二人はようやく自分の思いと相手の思いに気づきました。まどかちゃんから報告を受けた時、私は我がことのように喜んでしまいました」

そう、私は告白されて初めて、自分の気持ちに気付いた。
私も誠さんのことが好きだったのだと。

「でも、それから初キスまでが長かったこと」

会場からどよめきが。

父はすこし、のけぞっていました。

「詳しいことを話すと二人に怒られそうなので、ご想像にお任せいたしますが、周りが盛り上げ、お膳立てをして、ようやく一步を踏み出すほどの奥手の二人でした」

命拾いしました。

私がか、曜子ちゃんがかは置いておいて。

「ただ二人の仲の良さは、並ではありません。今では朝起きてから、学校に行き、食事を食べ、眠るまで、ほとんど一緒にいます。離れているのは、トイレに行く時とお風呂に入る時くらいでしょうか。……いえ、お風呂は一緒に入っているかも知れませんが」

はーいーってーいーまーせーんーかーらー!!

ここは声を大にして抗議したい!!

……他はあっているけど。

「そんな二人がようやくこの日を迎えることが出来たこと、私も嬉

しく思っています。まだ独身の私にとって、二人は理想像であつたり目標であつたりします」

曜子ちゃんから理想とか目標と言われると、何となく面映い気持ちもする。

だって、私達は曜子ちゃんに助けられたり、教えられたりしてばかりだったから。

……有り難う、曜子ちゃん。

「おめでとう、誠くん、まどかちゃん。いつまでも仲良く、お幸せに」

たくさん拍手に深く一礼をして、曜子ちゃんの挨拶も終わった。

さて、次はまた私達の出番だ。

披露宴の定番。ウェディングケーキの入刀。

ああ、まさか自分がこれをやる方になるとは。

このお店は食事もおいしいが、何と言ってもケーキが美味しくて大きくはないけれど人数分の、生クリームをたくさん使った白いケーキを作ってくれた。

苺の赤さがところどころ彩られて、とても綺麗。

ただケーキの中央に型どられたハートに、切れ目を入れることが何となくためらわれたけれど。

司会の方の言葉に従って、ケーキの前に立つ。

誠もさんもちよつと緊張気味。

でも、一緒に長いナイフを持った時、ちよつと目を合わせたらにっこり笑ってくれた。

そうね、緊張してもしょうがない。

楽しんでいきましょう。

「新郎新婦、ケーキ入刀です！」

たくさんのフラッシュの中、私達はゆっくりとケーキに入刀した。

笑顔を作ってみるけれど、やっぱり恥ずかしいな……。

芸能人さんって、凄いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3308w/>

ふたりが家族になるまでの

2011年10月10日12時06分発行